329
412

始

特216
361

恐慌

伊藤永之介著

文藝戰線叢書
第九篇

文藝戰線出版部

目次

恐慌……（三）
指……（九）
見えない鑛山……（一〇三）
山の一頁……（一二三）

恐

慌

恐慌

休業ださうてすね

『あかにし銀行』入口のいかめしいポーチの下はギッシリ人で埋つてゐた。

自動車會社の運轉手（それは同僚の輕蔑を買ひながらもコツ〳〵貯金してゐる、あかにし關係の自動車會社の運轉手）子供を背負つた汚い身なりのお主婦さん、待合の女中風の女、若いのと中年增のと二人連れの藝者、不恰好にドテラを着た漁師（これはまた、あかにし樣なら大丈夫と海產物を背負つて來てはその賣上のいくらかを戻りに預けて行く、あかにしの鄕里の漁師）カーキ色のセーラーバンツを着た小僧――それはさう言つた勤勞階級の網に包括されるところの、僅かばかりの粒々辛苦の預金を、資本家の飽くことを知らぬ貪慾さで、ペロリと食はれた日には、泣いても足りない小口預金者の群であつた。何處かの銀行の小使らしい男が、あはてゝ來て無理矢理に中へ割込まうとしたが、忽ち罵聲と一緒に多勢の肩と肱で跳ね退けられて了つた。

凡そ生氣といふものの無い、ヘンに白み返つた顏をした營業主任酒詰二六は、かうした光景にチラと見てはならないものを見たときの一瞥を投げながら、建物の横の通用門を潜つた。

二六は早朝から募集員よろしく俥に乘つて銀行から銀行を縫つて歩いたが商談は何處でも整はなか

つた。いや、市中銀行でも一番あぶない銀行として大藏省の一屬官がかかり切りで監視してゐる程の『あかにし』を相手にしないことに何の不思議があらう。

窓口からはマスで銀貨を算へ、數字を讀み上げ、算盤を彈く、麻雀の牌をかきまはすやうな騷音が響いて來た。行員たちは落着きなく右往左往し、電話のベルが間斷なく鳴つた。がそれは、その騷がしさ慌しさにも拘らずヘンにしめやかだつた。

重役と主任級の大部分は出拂つて、擔保品を入れた折鞄を抱え、決濟資金を蚤とり眼でさがし廻つてゐた。二六は商談の不成功の責任が、暴慢な榮耀の限りを盡した赤西のそれにあるのではなく、自分の責任ででもあるかのやうな自責にふるえながら、重役室の扉を押した。

まだ三十を出て間もない赤西頭取の、銀行のこのやうな危機に臨んでも尙平然たる血色のいゝ顏を見出して、やゝホッとして自分の事務卓に戻つた。光輝ある『あかにし銀行』の危機は、そのために十五年間の忠勤をはげんで來た酒詰二六の心を言ひ知れぬ不安で脅やかした。二六は預金者からかかつて來る、間斷のない、瘡口からガーゼを引ッ張り出すやうな電話の音に、眉を顰めて兩手で耳をふさいだ。

先々代の赤西は、江戸へ出て來ると握飯を腰にブラ下げ草鞋がけで日がな一日歩き廻つた。そして安い土地であれば飛地であらうが袋地であらうが片ッ端から買つて歩いた。

先代赤西吉左衞門は赤西家創業の祖から算へて十代目にあたり東京に於ける大地主であつた。その所有土地は市内に十萬坪、市外に三萬八千坪、小笠原島に三十五萬坪、其他合計五十八萬五千坪に及んでゐた。が世界大戰を楔機としての、資本主義日本の素晴らしい發展振りと好景氣を、呢と傍觀してゐる事の出來なかつた吉左衞門は、飜然單なる封建地主から近代資本家に貌變した。大正八年には既に彼は二十有餘の銀行と事業會社の重役であつた。

過勞のために急激に老衰した吉左衞門のあとに、英國見學から歸朝して親父の代理で事務を看てゐた息子がアトにすはるやうになつて、すべてに器用なところから社員たちから天才のやうに言はれてゐる若き天才昌三は、調子に乘つていよいよ事業の手をひろげた。

東方汽船に三百萬圓、日本土地に三百萬圓、赤西倉庫に五百萬圓、關東モスリンに六百萬圓、大東京都市に四百萬圓等々の大焦げつきをつけて赤西家事業の金融機關である『あかにし銀行』は既に去年から破綻に瀕してゐた。昌三は躍起となつて恢復をはかつたが及ばなかつた。

震災後、昌三は時價二千萬圓の所有土地を擔保に入れて日本銀行副總裁のキモイリで勸業銀行から六百萬圓借り入れた。同じ土地の二番擔保で他の方面から四百萬圓借金した。三番擔保で自分が社長

である乘合自動車會社から四百萬圓引き出した。引き出された自動車會社は一年前から數百人の運轉手車掌の血と汗の結晶である一萬圓からの上り高を毎日取り上げられてゐた。お負けに去年の暮、何うにも年の瀨を越せなくなつた『あかにし銀行』は二百萬圓の社債を自動車會社に募集させて辛くも一命をとりとめた。そして收入を悉く『あかにし銀行』に注ぎ込んで了ふ自動車會社自身は、他から借金をして居る狀態なので七十圓からの株が三十圓臺に暴落して了つた。

去年の夏昌三が『あかにし』の姉妹銀行『平良目銀行』を起したのもこうした苦境を切り拔ける爲めだつた。平良目銀行は全國に支店網をはつて、民衆を疑瞞しその血と汗の結晶である小金をかき集めて姉銀行『あかにし』を救濟することにつとめた。

讀者は定めし赤西なる名を奇異に感じられるに違ひない。が私は幸に赤西家に關する次のやうなエピソード挿語を物語ることが出來る。

女中が菜賣りを呼びとめて値段をかけ合つてゐる。そこへ乾物の埃を拂つてゐた赤西老人が、ノコノコ出て來て十錢のものは三錢位ゐの値をつける。菜賣りはムッとして籠を背負つて行つて了ふ。あとに菜ッ葉の屑が落ちてゐる。老人はそれを一つ一つ丁寧にひろい集めて臺所へ持つて行く——。

赤西家に不幸があつて老人が自分で棺桶を買ひに出掛ける。言ひ値で買つたことのない老人は棺桶

さへも値切らなければ承知出來なかつた。桶屋は赤西のことなので敢て不思議とはしなかつたが、餘りの値踏みに中々應じなかつた。が老人は目敏くその棺桶のかげにもう一つの小さい子供の棺桶を認めた。ついに老人はそれではその小さい棺桶を負けろと言つた。桶屋は冗談に違ひないと思つて皮肉の積りで負けてやらうと言つた。桶屋は同時に目をまわした。老人は小僧に手傳はせて大きいのと小さいのと棺桶を二つながら運んで行つて了つた。

この樣にして乾物屋『明石屋』はいつか『赤螺（あかにし）』となつたのであつた。

かうした祖先の血を引いた先代吉左衞門は十年ばかり前K大學に百萬圓寄附して新聞の社會面を飾つたことがあつた。がこのことは同業者の間では物笑ひの種になつた。

この寄附の內容は毎年一萬圓づゝ百年間に亘つて寄附するといふことであつたが、百萬圓の利息は六分の利廻りと見ても六萬圓になる、するとこの『社會的美擧、寄附百萬圓』はその實利息の僅か六分の一を寄附するものに過ぎなかつたから……。

二月の末から三月にかけて『あかにし銀行』は毎日の交換尻の決濟が出來ない狀態になつた。重役支配人、主任は毎日血眼になつてコール漁りに狂奔した。

赤西直系の三十有餘の事業會社の半數は、倒潰に瀕してゐた。その金融機關銀行たる『あかにし銀

行』は逆にこれ等事業會社の最後の血の一滴まですすらなければならなかつた。重役以下の血眼の奔走も役に立たなくなつて來た。市中銀行の一として大藏省特別監視つきの『あかにし銀行』を相手にしなくなつた。

赤西の敗北は金融資本主義に對する所有土地を背景とした產業資本の敗北だつた。そしてその中で十五間の忠精をはけんで來た酒詰二六は先代吉左衞門に對する極端な崇拜と隷屬の結果として封建的な塊に等しかつた。

二六は新年の挨拶や用事で主家へ行つて、いくら脊骨がいたくてもからだを反らしたこともなく、足がしびれても膝を崩したこともなかつた。何故なら二六は十五年の間に、行儀が惡いと言つて昇給から漏れたものや、議論めいたことを言つたと云つて直ぐに馘首になつた同僚を二三ならず知つて居たから……。玄關に犬の足跡がべタべタついて居るのを見ても、二六は勝手口から廻ることを忘れなかつた。

二六は毎朝登行すると同時に會議室に行つて、サロン藝術家大川三郎の描いた立派な額緣の中に納つた吉左衞門の肖像の前に行つて叩頭することを忘れなかつた。何處へ行つても資金を廻はして呉れる相手がなく、老ひほれ馬のやうにショボショボ銀行の通用門を潜る瞬間にも、二六は『あかにし』の神祕的な萬代不易を信じて居た。

先代吉左衞門がその席を昌三に讓ると彼もまたその崇拜と隷屬とを昌三にうつした。英國金融界を見學して來た昌三の銀行論は、二六の耳には如何なる流行よりも新しかつた。三十そこそこの青年の昌三は、三十有餘の事業會社を巧みなコツクのやうに料理してゐる。いや昌三は最新の知識とニュースを得るために自用車を飛ばして財界の名士、大實業家を歷訪し、ゴルフを遊び、乘馬を試み、各種の倶樂部の會合に出席するめまぐるしい生活の合間合間のホンの珈琲をすする程の數刻の間に、あらゆる關係事業の劇務を手品師のたくみさで總攬してゐる。

ゴルフ場から眞ッ直ぐにやつて來た昌三が、大東京土地の商談が如何に經過し、乘合自動車株が二十圓臺に崩落し、大阪三十五銀行の資本金一千萬圓の三分の一が幽靈株であることを、三面記事のめまぐるしさで語るとき、彼酒詰二六は床屋の椅子で居眠を催したときの恍惚さを覺えるのであつた。

二ケ月近くの連日のはけしい活動は、さうした活動に馴れない二六を神經衰弱に陷れてゐた。二六はタクシーの中で車がオモチャ箱のやうにひつくり返るやうな恐怖を感じ、銀行の通用門を潜る瞬間眼の先が眞ッ暗になつたやうに感じた。

がまた二六は重役室に赤西昌三の健康なハム色をした顏を見た瞬間には救ひの神を見たやうに感じ

たのであつた。そして自分の事務卓に戻つた二六の胸に『あかにし銀行』はまだ潰れないといふ靈感（インスピレーション）の浮んだときであつた。

玄關前に一臺の自動車が停つた。すぐにそれから六、七臺になつた。中の人物はあはただしく扉を排して受付にかけ込んだ。

二六は給仕が銀色の名刺受けと一緒に差し出した名刺の文字を讀んだ。二六はすぐに應接室に出て行つた。そして新聞記者の投げつけた次のやうな言葉に打たれてフラフラと眩暈（めまひ）を感じた。

『休業ださうですね』

『いや、そんなことはありません』

二六の聲には響きがなかつた。目白押しに扉のかけから現はれる新聞記者が同じ質問の矢で二六を射た。二六の眼の先は眞ッ暗になつた。

『どうしたんだ、ひどく顏色が惡い』

上等のハムのやうな皮膚の色をした赤西頭取は二六の顏を見ると言つた。が續いてゾロゾロ這入つて來た記者達の襲來は、流石に昌三の顏色を變へるに充分だつた。

『休業ださうですね、今議會で大藏大臣が發表しました』

『これは初耳です。片丘君も驚き入つたことを言ふものですね。御覽の通り當行は營業を續けて居ります。なにしろそんなことを發表されちァ一寸困る、明日のトリツケは大變でせう。これから重役會議を開いて協議しませう』

階下の方から數字を讀み上げ、算盤をはじき、銀貨を算へる驟雨のやうな音が聞えて來た。二六は隣の會議室にのがれて、一昨年の春死んだ吉左衛門の、二六をも含めての被壓迫階級の上に超然たる顏を、あはれみを乞ふやうに一瞥して、壁際のモロッコ皮の長椅子の上に身を投げた。

一時間程前海老名常務は大藏省に天次官を訪ねて、五十五萬圓の手形交換尻の決濟がつかず支拂停止のやむない事情を報告した。その際天次官から發表の時期を問はれたので今日にでも發表するかも知れないと言つた。支拂停止には驚ろかなかつた天次官も、今日發表するかも知れないといふのには面喰つた。天次官はあはてて衆議院議事堂に車を飛ばして片丘藏相に報告する責任を果さなければならなかつた。

世界大戰のどさくさまぎれに暴慢のかぎりを盡した資本主義日本は、戰後の反動でもがき苦んでゐた。少數の金融資本家を除く以外の多數の弱小資本家は、破綻に瀕した銀行會社の經營難に苦しんでゐた。其處へあの震災だつた。燒け出された中小商工業者は震災手形の利拂に追ひつめられ、關係事

業に貸出を焦げつかし煮ても燒いても食へない震災手形をしこたま背負ひ込んだ銀行は、危險な遣り繰りで、その日その日の表面を繕ふことに急しかつた。

中小財閥と産業資本家の手中にある事業會社と機關銀行――この相互關係は獨占支配と大金融資本の聳立のもとではお互ひに傷け合ひながら沒落して行く關係となつた。かくて大金融資本の强力な獨占支配化を必死に防戰しながら何うにか浮上らうとして、中小資本家がもがきにもがいた揚句の恐慌は必然となつた。二億七千萬圓の震災手形を何う處分するか、ブルジョアジィの執行委員會――衆議院豫算總會は勢ひ問題の中心を其處に置いてゐた。大金融資本の支配が必然であるかぎり、中小資本の合同併合、沒落は必然でありその自覺症である恐慌も、また避け難い必然の過程であることに氣づかなかつたものは、强ち藏相のみではなかつたに違ひない。而も自分の辣腕と專門技術が金融恐慌を未然に防止するだらうと自惚れてゐた片丘藏相が調子に乘つて、あの有名な失言問題を惹き起したのは不思議ではない。魔がさしたとでも言ふのであらう。片丘藏相は實問の答辯中、その自惚にも拘らず不幸にもタツタ今の天次官の報告を想起したのであつた。

「……現に今日正午に於て『あかにし銀行』とその姉妹銀行たる『平良目銀行』が破綻致しました。是等に對しまして預金は三千七百萬圓ばかりありますから、是等に對して何とか救濟しなければならないのですが、さて救濟するとせば是等の財産を整理したところのものを引き受けるところのものを見出さねばならぬのでありますが、是等は整理つきませぬ」

是等是等の連發で甚だ聞き苦しかつたが、この失言はブルジョアジィの間に異狀なセンセーションを呼んだ。ブルジョアの番頭どもは議會に於て毎日の樣に恐慌の責任者として片丘藏相を追求した。萬年筆を走らせてゐた新聞記者連中は、片丘藏相がアベコベに眼玉をクルクルさせて驚いたほど、烈しく椅子を蹴倒しながら電話室に殺倒して行つた。

數分後、各新聞社の自動車は、磁石に集る鐵屑のやうに、一セイに『あかにし銀行』めがけて疾走してゐた。

2　コール・ローンと中風

千九百二十七年三月十五日、各新聞の社會面は片丘藏相の失言と『あかにし』『平良目』兩銀行の休業に關する寫眞と記事に依つてうづめられた。

その内容を疑はれて居る銀行には猛烈なトリツケが起つた。中田銀行はその後の四日間に七百餘萬圓の取付を受けた。銀行といふ銀行の前には預金者が長い列をつくつて押し寄せた。

一週間の間に上下田銀行、中山銀行、村上銀行、五十八銀行、喜行銀行、深尾銀行が前後して倒れた。

「あけろ、あけないと叩き毀すぞ」

「重役を出せ」

「金を返せ、泥棒、山師」

かたくとざした銀行の鎧戸の前では群衆が唸つた。

銀行員たちは裏口からコソコソ出入りしてゐた。

群集の列の中には火のついたやうに泣き叫ぶ赤子を脊負つた主婦さんも居れば、父親が病氣で入院する金を引き出しに來たと訴えてゐる若者も居た。

大阪府のある村の小さい商店の妻君は自分の名義で預金してゐたのがとれなくなつたことから夫に申譯ないといふので夫の晝寢してゐる枕元で自殺した。横濱のある馬車曳きは二十年間働いて蓄めた金を棒に振つて失望の餘り氣がフレて了つた。地方の破綻した一銀行の支配人は預金者から侮辱されて自殺した。

休業前にかけつけて二千圓引出して來た男があつた。第一日は疊の下にかくした。第二日は天井裏

にかくした。第三日はカマドの中にかくした。心配のためにその間一睡もしなかつた。三日目の晩たうとうウトウトして眼がさめて見ると二千圓はすつかり灰になつてしまつて居た。

不見轉預金者といふのが出た。不安のために甲銀行から乙銀行へ乙銀行から丙銀行へと三日に上げず預け變へるのがそれであつた。また本店があぶないといふのでわざわざその支店に預金を持つて行つたものも居た。東京の××新聞は夕刊の一隅に次のやうな讀者からの手紙を載せた。

『わたくしは貧乏な勞働者であります。久しくカカアに病氣され困つてゐます。こんどカカアが死にましたので葬式を出さうと其の銀行に取りに行つたが矢張り駄目でした。記者樣の力で銀行にかけ合つて下さい。でなかつたらウンとやッつけてやつて下さい。私はどうしても我滿が出來ないのです。（原文の儘）

讀者は既に昭和二年の三月乃至四月の恐慌の際倒れた銀行の中に、資本金一萬圓以下の銀行が五つあつたことを知つて居る筈だ。

その中の一つ某縣某所船方銀行鳴海頭取は一生に三度目の上京をして取付騒ぎの東京市中をコー

ル・ローンをさがし廻つてゐた。出羽銀行も取付けに會つて休業した。が鳴海頭取は、東京に行くと
コール・ローンと言つて何萬でも何十萬でも即座に貸して呉れる結構なものがあるといふことを聞き
込んだのであつた。

鳴海頭取が第一の銀行に飛び込んだときに營業主任は訊いた。

「資本金は？」

「五千圓」

「お斷りします」

第二の銀行は言つた。

「資本金は？」

「五千圓」

「御冗談でせう」

第三の銀行は言つた。

「資本金は？」

「五千圓」

「ハッハッ、ハハハハ……」

コール・マネーは何處にも轉つて居なかつた。

鳴海頭取は失望して人力車に乘つた。東京へ行つたら人力車に乘れと敎へられたのを思ひ出したのと、持病の中風が起きて來さうな氣がしたからであつた。大正十二年九月一日正午であつた。鳴海頭取は四人の行員が驚いて飛上つたほど突然恐ろしい聲で呶鳴つた。『甚三甚三、醫者を呼んで來い』呼ばれた給仕は何のことかわからなかつたが、聲に驚いて外に飛び出した。が行員たちは外の理由で驚いた。この瞬間輕い震動が過ぎて行つたから……。行員たちは叫んだ。『地震ですな』これがあの九月の大震災の餘波であつた。鳴海頭取は中風が起きたと思つたのであつた。

三重銀行錢瓮專務は行員酒詰五六の差出した錫の名刺受から一枚の名刺を摘み上げた。

「資本金は？」

「五千圓」

不安氣にキョトキョトあたりを見廻はして居た鳴海頭取は尙數度の應答をした後に意外の言葉に打れた。

「よろしい、三重銀行××支店船方出張所！」

それから數刻の後に、三重銀行四階の會議室では日本銀行合同史上エポック・メーキングの會議が開かれた。それは勿論祕密な會議であつたから、我が酒詰五六君の外にはかかる會合の開かれたことも、隨つてその內容も知るものが無かつた。

五六はその日のメンバーたる三重系銀行會社の重役連を案內したり、病氣中押して出席した第五三八銀行の常務のために柔いソファーを運び込んだりした後、番犬の役を承せつかつて重い扉によつて次の應接室に締め出されてしまつた。

五六は幾分不平さうな顏をピッタリ扉に寄せて話を盜まうとしたが、錢甕專務のお抱えタイピストで、その俸給五千圓と噂され若い行員の間に物議をかもしてゐる諏訪利子の鳩の羽ばたきのやうなタイプライターの音に妨げられてよく聞きとれなかつた。ただ時々『我輩』とか『銀行の合同』とか、『銀行の併合』とかいふ言葉だけがきこえた。が我が五六君は銀行が合同すれば祝賀會があつて一杯のめるんだ位ゐにしか考てゐなかつたから別段興味も感じなかつた。

が今度はたしかに耳馴れた錢甕專務の呶鳴り立てるやうな聲だつた。五六はそれを他の人には讀みにくいが自分だけには分り易い親しい友人の手紙のやうに聽き取ることが出來た。

『……我が金曜會のスローガンは全國二千有餘の銀行を我が金曜會に屬する大銀行の傘下に集中するところにあるんであります。併しながらこれはひとり金曜會のみが行つて居ることではありません。歴代の大藏大臣も合同に對して相當の考慮を拂ひ、直接官吏を派遣して地方銀行の合同を勸告せしめ必要の場合には評價、斡旋その他の便宜を提供し、勸告に應ぜざるものには相當峻嚴な强壓手段をさへ加へて居るのであります。また現に片丘藏相は內容不良の數銀行を整理合同せしめるために、實行方法として夫々一流銀行に合同合併せしめる方針を樹て、着々その內容調査を行つて居るのであります。ハイ。斯の如き大藏省の方針に依つて合同されて消滅した弱小銀行は、大正五年には十行に過ぎなかつたものが、十年には六十八行、昭和元年には百十九行といふ樣に逐年著しい增加を見て居ります。ハイ。かくして大藏省では昭和七年末には、全國銀行數五百行とする計畫との事であります。ハイ。然しながら諸君、これは勿論喜ぶべき傾向ではありますが、我が金曜會の目標からすれば甚だ姑息たるを免れないものであります。然るに諸君、我々は幸にも此處に未曾有の恐慌、イヤ、ハイ、絕好の機會に遭遇致しました。自然の力程恐るべきものがありませうか、かの財界の癌と稱せられてゐる震災手形も自然の力の致すところでありまして、無能な政府や大藏大臣や政治家などよりも、この方がズッとよく財界の大掃除をやつて呉れるのであります。自然の大箒で凡百の銀行を一掃きに掃き淸めて了ふことに依つて、大銀行の基礎は益々鞏固となり、大銀行相互の競爭を廢止させ、競爭廢止

に依つて支出を減じ收入を膨張させる二重の利益を受けるのであります。ハイ、姑息なる官吏或ひは說を爲して曰く。銀行の合同、銀行資本の集中化は大資本家の利益を擁護し助長する效果はあるが、小銀行の消滅に依つて小銀行を相手とする中小商工業者の金融を奪ふことになると。併しながらこれは寧ろ我々の理想とするところであります。ハイ。尤も自然の威力に依ると申しましても御存じの如く現內閣は臺北銀行を救濟して時局を彌縫せんとして居るのでありますから、我々は野黨をそそのかし、時代錯誤にして何等實力なき樞密院を抱き込み、現內閣の臺北銀行救濟案を一蹴し、以て時局を紛糾せしめ、內閣更迭のどさくさまぎれに、我が金曜會の目的の貫徹につとめんとするものであります、ハイ」

錢甕專務は自分で自分に返事をする癖があつたので、誰も殊更に返事をする必要を認めなかつた。

ブルジョア文明の最高產物たる三重ビルディング四階の一室は、一瞬間大森林の靜寂によつて占められた。一重役の突拍子もなく癇高い聲がその靜寂を破つた。

「弊害は全くありませんか？」

錢甕專務は斷乎として答へた。

「全くありません」

3　夢とサラリーマン

東京市外大久保銀行支配人鮒木は午前八時に眼を覺した。昨夜の計畫では六時に起きて三重銀行錢甕專務を往訪し、大久保銀行の救濟を哀願する積りであつた。何故なら錢甕專務は、夜は休養のため一切何人にも面會しないといふ鐵則を設けてゐたから……。

俺は到底大銀行家の資格がない——鮒木支配人は眠い眼を小摺り小摺り嘆息しながらタクシーを呼んで三重銀行にかけつけた。

途中、彼は心配になつて自分の銀行の前を走らせた。銀行の前はもう群衆で一杯だつた。

三重銀行にかけ込むと專務はもう三重物產に行つたあとだつた。鮒木はあたふたと三重物產にかけつけた。がもう錢甕專務は三重生命に行つたあとだつた。鮒木は更にタクシーを三重生命に驅つた。が錢甕專務は既に銀行集會所に廻つてしまつてゐた。鮒木は必死の面持ちで銀行集會所に車を馳らせた。が專務は衆議院に向つてゐた。老ひぼれ馬のやうなタクシーは到底輕快な自用車ビウイックの敵ではなかつた。

鮒木支配人はタクシーを捨てて、一時間も自働電話にかかつてゐた。

錢甕專務は六時に起床して顔を洗ふとすぐ書齋に這入る習慣になつてゐた。其處には帝大出の若い法學士の祕書と、その祕書の作製した各種の統計と圖表と香りの高い珈琲が專務を待つてゐた。

米國準備銀行の準備割合、英國三大銀行の金利歩合――專務は祕書からその他樣々の說明を聽取した後に、獨逸銀行の合同過程とか某大官の金解禁論とか三重銀行調査部の日本信託業の趨勢とか、さう言つた記錄や著述を朝每に朗讀させ或ゐは解說させるのであつた。かくて錢甕專務はヒルフアデングその他の難解な金融資本論や、恐慌に關する學說を懶惰な小銀行家が待合や妾宅で眠つてゐる間に自分のものにした外に五杯の珈琲を空にした。

政治、經濟に關する書籍がギッシリ詰つてゐる書棚の上に掲げられた額には、三重財閥の總帥高水間九州雄が下手糞の文字で殴り書きした、金融資本の飽くなき蓄積と獨占支配を露骨に表象した次の句が讀まれた。

努力　努力　努力

鮒木支配人が郵便配達のやうに疲れた恰好で三重銀行に舞ひ戻つたとき、錢甕專務は既に重役室のソファに反り返りながら數百名に近い志願者の口頭諮問を行つてゐた。

三重銀行の手元には、十名の採用に對して三千通ほどの履歷書が來てゐた。三重銀行を振り落された三千名に近い大學卒業生は次で彼方の銀行此方の會社で篩ひ落される度に次第にそのレベルを下げしまひには店の小僧代りとか巡査まで落ちて行つた。

扉のかげからバネ仕掛けで彈き出されるやうに自分の前に現はれる青年の上に、錢甕專務は一々貪慾な一瞥を投げ、香りの高い葉卷の煙をフーと吹きかけた。

「女に惚れられたことがあるか」

「惚れられるほど間抜けではありません」

「よろしい」

青年は飽氣にとられてピョコンと叩頭して扉の外に消えた。小卓を控へた文書課長は赤鉛筆で「及第」と書きつけた。

「苦學をしたことがあるか」

「許婚の女の仕送りで勉强しました」

「落第」

「酒は、煙草は」

『兩方ともやりません』
『落第』
『資本主義の理想は』
『博愛と平和』
『落第』
『信託業とは』
『經濟界の花形』
『及第』
宇仁專務は文書課長を顧みて呼んだ。
『何人目かね』
『二百二十二人目です』
『よろしい、三十分間休憩』
そのすきに蒼白なあはれな表情をした大久保銀行支配人が必死の面持で飛び込んだ。
『破產です、四十萬圓程足りません』

錢甕專務はベルを押して營業課長を呼んだ。
『大久保銀行に現金二十萬圓、期間向ふ半年間、我輩の自動車に載んで呉れ給へ』
專務自身が自働車に金の山を載んでかけつけ預金者を安心させたといふことは翌日の新聞に銀行界の美談として掲げられた。がこの救濟は取付けで休業に瀕したとは言へ內容の堅實な大久保銀行を三重銀行が自己の支配下に引き摺り込んだものに過ぎなかつた。
地階の食堂ではこの採用試驗にからんで例によつて例の如き話が持ててゐた。
『帝大の初任給はいくらだつたね』
誰かがさう言ふと、
『七十圓だよ』
昇給規定を隅から隅まで暗誦してゐるので『昇給規定』とアダ名されてゐる竹蓋はすぐ應じた。
『私立は』
『五十五圓』
『一番初任給のいいとこは何處だ』
『さあ何處と言つて……日本郵船なんかいい方かも知れない、八十圓だからね、古河が七十八圓、大

同電力が七十五圓、東京瓦斯、電燈が同じく七十五圓、それからたしか帝國生命、第一生命、大日本製藥も同額だね、此處らがまあいい方だらう」

「物産はいくらだつたか」

「五十圓さ、が手當が大部ある」

「第一は」

「七十圓」

誰かがハンジョウを入れた。

「素晴らしい、生字引だ」

笑ひ聲が起つた。が竹蓋は平氣なものだつた。

「おい酒詰、五千圓が見えないね」

珈琲をすすつてゐた小乙女が茶碗をカチリと下に置いて五六を呼んだ。

「また鎌倉かも知れないね」

五六は笑ひながら答へた。小乙女はムシャ〳〵麵麭を頬張つた顔を食卓の向ふから突き出して五六の耳に呟いた。

「例の一件がね、大部問題になつてゐらしいよ、何でもその種を蒔いたのが君だつて評判だぜ」

「そんな馬鹿なことが……」

五六はいやな氣がして口を噤んだ。

タイピスト諏訪女史については取るに足らぬ色々な噂があつた。彼女は二十六七にもなつて獨身婦人だつたので若い社員たちは色んなヨタを飛ばした。その取るに足らぬ噂がやや具體的になつたのは五六が、諏訪利子の仲のいい友人である同じタイピストの前田春江から、春江が利子自身の口から聞いたといふ、錢甕專務が保養のためのヒト月二度の鎌倉行に同道した時の、ややくわしい話を聞いてからだつた。

五六はその人のよさと迂濶さから同僚の誰れ彼れにその話をした。それが課長の耳に入り重役間にまで擴がつて行つたのであつた。

五六は何時になく不氣嫌な顏をして歸つて來た。小乙女の言つたことが、氣になつて仕方がなかつた。五六の家には金倉と石井が來てゐた。二人とも戰後の恐慌の波をかぶつた二、三年來の失業者で人のいい五六のところに始終居候したり飯を食ひに來たりしてゐた。

五六は障子のかげに女房のすみを呼んでビールを買つて來るやうに言つた。すみはブツブツ小言を

言つて居たが、トドのつまり自分のただ一枚のよそ行の羽織を風呂敷に包んで臺所から出て行つた。

一丁羅の服を洋服吊りにかけながら五六は呼んだ。

『待て待て、そのうち五百圓ばかり這入るから』

それは五六のいつもの口癖であつた。五百圓は愚か十圓の金も餘分に這入つたことはなかつた。

二、三年前失業して以來、夥しい知識階級の失業群と共に飢餓に襲はれてゐる金倉や石井などと夢のやうな儲け話をすることで、五六は僅かに自分を慰めるのであつた。

が五百圓といふ金額は決して漠然たる金額ではなかつた。それだけあれば五六は現在の苦しい生活から救はれるのであつた。ある宴會の流れで一夜を明かした待合に腐れ縁がついて五六は彼にとつてはすくなからぬ借金をつけた。待合の主婦はしきりに銀行にやつて來るので、五六はクビになるのを恐れて高利貸から借金して待合の尻をぬぐつた。高利貸は三日にあげず五六の家を襲擊した。ブルジョア生活の眞似はすつかり五六の『家庭の平和』を破壞して了つた。

茶簞笥も長火鉢も何處かへやつてしまつて目星しい道具の一つもないガランとした部屋の中に、五六は自分で隣りの部屋からチャブ臺ばかりに机を運んで來て、すみが買つて來た二本のビールと日魯の蟹罐をその上に乘せた。

『かういふものを始めやうと思つてね、まあ讀んで呉れ給へ、四、五日中に二千圓ばかり出來る筈なんだ』

二年餘の失業でひどい貧乏に喘ぎながら、一張羅の洋服と、ある小保險會社の徵收課の次席であつたときの下役に對する態度だけは後生大事に保存してゐる金倉は、さう言つて奉書に書いたものを出して見せた。

『よう、いよいよやるんだね』

五六は手にとつて讀み始めた。表てにはかう毛筆で筆太に書いてあつた。

簡易別莊會社設立趣意書

『中々名文だね』

『いや、その文章にはとても苦心したよ。一晩夜明しをしちやつたんだ』

『これだけ書くのは中々骨だよ』

『それでね、君の方の課長級の人を當つて貰ひたいんだ。八代君にも賴んである。何しろ三百圓で別

莊が一軒出來るんだからね」

『大丈夫だ、僕の方だけでなく方方當つて見るよ』

憂鬱に默つてゐた石井が思ひ出したやうに横から口を入れた。

『かういふ別莊はフランスなんかに澤山あるらしいね。サラリーマンでも持つて居てドンドン避暑なんかに出かけるんださうだ。日本ではまだ其處まで行かないがね、まあ中流階級、銀行會社や役所の課長級相手だね、こいつはうまく行くと思ふよ』

僅か二本のビールで三人はいい氣持ちになつて了つた。五六の頭には數日前のあの錢甕專務たちの重大なる會議の番犬としての自分の姿が浮んだ。三重銀行のピラミツトの頂點をめざして行く飛躍的隆盛——假令自分はその一番犬に過ぎなかつたとしてもその論功行賞に漏れる筈はない。五六は急に昇給昇任が自分に降りかかつて來たやうに感じ出した。

五六は人知らぬ喜びに胸をふくらまして叫んだ。

『お互ひに大いにやらう！　もう少し待つて呉れよ、僕もそのうち君等をどうかするから』

金倉も眼を輝やかした。

『石井も國へ行つて金をつくつて來るといふんでね、二千圓出來次第田舍へ行つて貰ふことにしてるんだ』

十時過ぎになつて立ちかけた金倉は子供を寢せつけてゐるすみを呼んだ。

『奥さん、奥さん』

すみは寢卷のまま出て來た。

『濟みませんが味噌があつたら少し呉れませんか』

『ハイハイ』

『味噌汁がないと飯を食つた氣がしないんでね、この頃酒屋が寄りつかなくなつたもんだから……』

4　ブルジョアジイの癌

經濟界の癌——震災手形は臺北銀行の一億數千萬圓、朝鮮銀行の三千萬圓その他を併せて二億七千萬圓殘つてゐた。

この日本經濟界の腫物は同時に震災の打擊を受けた商工業者の腫物であつた。世界大戰後の反動でなやんでゐた一部の支配的大資本を除くブルジョアジイは、震災で一層ひどい打擊をうけた。

自分の番頭を政府及び議會に送り込んでゐる優勢な財閥資本家は、農民や勞働者の汗水の結晶であ

る大藏省預金部の資金を苦もなく引き出して急場を凌いだ。古河電氣、日立製煉所、東京モス、日本製粉、淺野セメントその他彼等××どもは預金部から勞働階級の血と汗のカタマリを巧みに盜み出して震災の燒址に數々の工場を建てたのであつた。

が彼奴等ほどの力のない商業、產業資本家どもはその眞似が出來なかつた。銀行は破綻に瀕してゐた。商工業者はその破綻に瀕した銀行の死物狂ひの追擊に追ひつめられて悲鳴をあげてゐた。

燒けあとのバラックに毒々しいまでの厚化粧をして客を呼んでゐる商店はどれもこれも『整理品』『二割引』『半額デー』『廉賣デー』の札を出して、金切聲を上げて片ッ端から商品を叩き賣つた。寄つた尻から皺くちやの一圓紙幣や白銅をかき集めて取引銀行に持つて行つた。かうして震災手形の內入金を入れなければ銀行から涙金ほどの資金も引き出せなかつた。商店といふ商店は捨鉢に自分からドンドン品物の値を下げた。そのことは又益々彼等を窮地に叩き込んだ。彼等は商品の代價として受けとつた手形さへも、銀行に割引して貰ひに行く度にその幾割かを震災手形の割賦金に取られた。利益どころか元金さへも上らなかつた。運轉資金はその度毎に減つて行つて破產の淵に一步一步近づいて行つた。さうかと言つて外の銀行では割引に應じなかつた。

耳かくし斷髮にあくどい色彩の着物を着て、ハート型に脣を描いた女たちが、グロテスクな支那金

魚さながらに街頭を游ぎ廻るやうになつたのは、震災のすぐあとだつた。

がそれは聰明な文明批評家やブルジョア文學者が評したやうに『自然の脅威によつて生命のはかなさを覺つた人間のすてばちな氣分』から來たものではなかつた。理由はもつと近いところにあつた。何故ならモダン・ガールそこのけの嘔吐を催したくなるやうなゴテゴテした色彩の新東京の商店街は軒並に三番、四番の質入擔保に這入つてゐた。自然の脅威によつてヒステリックな生存の慾望を覺えたのはモダン・ガール、モダン・ボーイ以上にこれ等の商店だつた。

復興局の建築技師たちがその建築美學から割出して、往來の人間に不快感を與へない標準建築を考案しなければならなかつたほど、商店といふ商店は凡ゆるペンキ化粧煉瓦で厚化粧した。だから金時の火事見舞のやうなモダン孃もそれがそのバラックを三番四番の擔保に入れてゐる商店界を濶步してゐるかぎり强ち不自然には見えなかつた。

ある有名な商店街はその商店の八割までは質入擔保になつてゐた。また破產しかけてゐた。いや既に取引銀行からの震災手形の內入金や利拂ひの矢繼早の催促で破產した商店がその小さい區域だけで六七軒あつた。

一月二十六日、政府は震災手形補償令と整理案の二案を衆議院に上程した。全無產大衆と無數の零細な預金者を踏みつけながら、前者は日銀を助け後者は臺北銀行以下の特殊銀行民間銀行を助けるものであつた。この法案がどんな性質のものであつたかは、それが上程されたときのブルジョア自身の反對演說が雄辯に物語つた。

東武夫は叫んだ。

『單(ひと)りこの政商或るは特權階級、資本階級といふやうなものを助けるが爲めに、二億七千萬圓といふ巨額の公債を發行するといふことは、實に時代思想に於いて非常なる誤れるものであることを斷言して憚らないのであります』

武堂山路は獅子吼した。

『本案は吾々實業家から見れば極めて簡單なるものであります。一口に申上げますれば正直なものは損をして横着なものは助かるといふ案であります。更に言葉を換えて申上げますれば、我國には政商といふ一つの部族があつて、錢がもうかる時分には自分の懐に入れて損をするときには政治家と結託して國民の膏血から成るところの國家の金をもつて救濟を受くる所の國であるといふことを示す案であります』

が折角のこの名演說も、議員の大多數は例に依つて控室に碁を打ちに出かけて誰もきいてゐなかつたばかりでなく、恰度その少し前に居眠りから醒めた代議士がアーンと一つあくびをした後に『お前のことだらう』と彌次つたので傍聽席は吹き出して了つた。それは別として衆議院では連日この震手法案、言ひかへれば政商壽々木商會救濟案が論議され、財閥三重の完全なる政黨たらんとしてゐる政友會が演壇に目白押しに陣笠どもを送つて强硬に反對した。外電はのちに日本のどの新聞よりも辛辣にこのことを批評した。

（四月二十二日朝ロンドン特派員發電）＝某イギリス財政通は語る。『今度の日本の恐慌が外國資本に與へる影響は尠くない。恐慌は全く政治が經濟に侵入した結果生じたもので、政治家の暗躍と陰謀がかくの如き大恐慌を生じたるは未だ類例なき不祥事である』

（四月二十三日ロンドン發電）＝日本の恐慌は日本自身の信用に空前の打擊を與へた。某銀行家は曰く。『恐慌の原因は政黨の陰謀によるものである。さきに朴烈事件を提げて政府の咽喉をつきたる政友會は今や再び震手法案を好餌として政權を奪はうとしてゐる』

政友會の執拗な質問によつて暴露された震災手形の具體的な事實は、次第に議會の外に漏れて行つた。

敏感な預金者は勃々取付をはじめた。その矢先に片丘藏相が不覺にも『あかにし銀行』の破綻を口外したことは、財界を拾收しがたき混亂に陷れ、そのどさくさまぎれに內閣を乘ッ取らうとする政友會にとつては拾ひものであつた。

『あかにし』『平良目』の休業についで銀行は續々倒れた。預金者はあらゆる銀行の窓口に列をなして押しかけた。得意になつて詰らぬことを喋つて味噌をつけた片丘藏相は『政府は日本銀行と協力して財界救濟の手段を講じてゐるから取引者は輕擧盲動を愼しむべし』との聲明を發したが何の役にも立たなかつた。各銀行は競つて日本銀行の貸出を受けて取付の襲來を待ち受けた。

日本銀行は徹夜して貸出に應じた。三月二十三日には日銀の貸出は五億圓を突破した。が嵐はさう永くは續かなかつた。三月恐慌は日本銀行がロンドン及びニウヨークの監督役に宛てて『金融不安全く一掃』の發電をすることによつて急性症狀から慢性症狀に這入らうとした。のみならず貴族院本會議は臺北銀行救濟、換言すれば壽々木商會救濟の震手法案を可決した。

が三重銀行錢甕專務はそのコールを回收しさへすれば臺北銀行が一たまりもなくお辭儀をすることも、三重銀行が先鞭をつければ東京市中大銀行が競つて同じ行爲に出るであらうことを知つてゐた。四月十一日錢甕專務が臺北銀行から七千萬圓のコールを引き出すことによつて四月恐慌の幕は切つて落された。

大資本の飽くことを知らぬ獨占支配に依つて垢田、茂手木に次いでこの恐慌で倒れた壽々木商會が臺北銀行を食ひ荒した額は二億八千萬圓に上つてゐた。

壽々木商會に對して當座貸越もやれば擔保拔きもやるといふ樣な出鱈目に營業をしてゐた臺北銀行は、三重銀行その他にズバリとコールを回收されて一タマリもなく參つてしまつた。

大正六年頃には世界的のスペキユレーターとして內地外國貿易十二億、外國間の貿易三億四千萬圓を取扱ひ、工業方面に於ても海運、電氣、砂糖、鐵、鐵道、毛織物、製粉、肥料、石炭、油脂、樟腦煙草、ビール、セメント、鹽、信託、燐寸、造船、化學工業、保險、金物、木材、染料、曹達其他六

十餘の直系及び放資會社を經營してゐた壽々木商會の總帥であり、東京驛頭で一少年に刺殺された故ハラ・ケイと結んで大壽々木の基礎をかため高橋是三世をそそのかして五千萬圓を政府から融通せしめたことのある老獪金直は、臺北銀行から締出されると直ちに上京して丸の内ホテルに陣取り得意の政商振りを發揮しやうとした。

が政治家を籠絡すること尙赤兒の腕をひねるが如しと考えてゐた金直も、自分の豫想の全く裏切られたのを感じない譯には行かなかつた。いや彼は今更事新しくそれを發見したのではなかつた。この數年來絶えず拂ひのけることの出來ない障害として自分と壽々木商會を脅やかして來た大財閥三重はまたしても嚴然として彼の前に聳立してゐるのであつた。

5　半年振りの邂逅

壽々木商會の大黑柱金直が無駄な奔走から丸の内ホテルに自動車を返して、肱かけ椅子に體を投げかけ『矢ッ張り駄目か』と歎息を漏らした恰度その頃、三重ビルデング五階の一室では、世にも不思議な祝盃があげられてゐた。中小財閥資本家の死活の問題であり、所謂財界の不祥事である動亂は此處では祝盃に價ひした。

日本に於ける獨占的貿易商として多年三重物産の一敵國を形勢してゐた壽々木商會が、命の親、臺北銀行に見離され、多數の債權者によつてその整理を急がれ責め立てられ、最早手も足も出なくなつたのを見ると、日本の總輸出入額の二割何分を一手に取扱ひ、その飽くを知らぬ利潤のためには莫大の人蔘を海に投げ込むことに依つて相場を吊り上げ、大正七年の米騒動には、全無産大衆の飢餓と憤激をよそにして、輸出米を孕んだ豚のやうに滿載した大貨物船數隻を、水上署の默認によつて神戸の沖合にかくしさへした三重物産は、その虛に乘じて猛烈な活動をはじめた。

だからその夜階下の三重銀行が既に金庫の扉をとざし廢墟のやうな靜けさに歸つてゐるときに、五階から七階までの物産は未だ明々と電燈をきらめかしてゐた。

その室の小卓の周圍には物産の主腦部と銀行の重役とそれに三重コンツエルンの總理事高水間九州雄の顏も見えた。大財閥三重の番頭としてのその所得額が尙久原、藤田、古河の財閥を合した所得高よりも大きいと噂されてゐる高水間は、恐慌が三重の獨占支配を飛躍的に强化するものであることを揚言し、物産の理事乙部甲吉は壽々木商會に對する物産の總攻擊は從來壽々木の手中にあつた數十種の外國商品の一手販賣權をたちどころに奪取し得ることを誓ひ、銀行の錢甕專務は一億數千萬圓の預金が多數の小銀行の沒落によつて水の低きに着くが如く三重銀行の金庫に流れ込むであらうことを證

明した。

而も錢甕專務は得意らしくこんなことをつけ加へた。

『一くちに一億數千萬圓と申上げましたこの金高は一體どの位の金高かと申しますと、凡そ六百七十年以前に建立された奈良の大佛樣の鼻穴の中に、大佛さんが立てられたその瞬間から現在までの間、一分間毎に五十錢玉を一ッづつ投げ込んで今日ヤットその位の金高になるのでありまして、それが僅に數ケ月の間に吾が三重銀行の金庫にノアの洪水のやうに流れ込むといふ譯であります。ハイ』

そして多數の產業資本家、商人、中小銀行の不安と恐怖と悶絕のなかにカチリと硝子の觸れ合ふ音とともに祝盃が擧げられた。

三重ビルデングの筋向ひのカフエー『黃金』へ行つて一本のビールと定食を攝つて來た酒詰五六は折から二臺の自動車でやつて來た『あかにし銀行』の重役以下の數名を正面の玄關で迎へた。

その一行の中には五六が豫想してゐた如く兄の二六の靑白い顏が見えた。兄弟はお座なりの挨拶を交はした。が五六は一目見た瞬間半年近くも會はなかつた兄の餘りの變り方に驚いた。普段から痩せてゐる兄はゲッソリ頰の肉が落ち、腮の骨が鋭く出て、眼に何か譯の分らない狂的と思はれるやうな光りを浮べてゐた。自動車からは一個の柳梱が降ろされた。それを二六ともう一人の若い男が兩方から抱えて尾いて來た。

五六はエレベーターで四階まで一行を案內して行つて會議室のスキッチを捻つてその中に導き入れた。

赤西頭取以下の一行は浮かない不安な面持ちで、やがて錢甕專務が物產の一室から降りて來るのを待つてゐた。五六は椅子を運んで來たり小使の持つて來た番茶をすすめたりした。柳梱の中からは帳簿や債券のやうなものが引ッ張り出された。その整理が一とほりすむと、二六は目くばせして弟の五六を次の室に呼んだ。

二人が椅子に同時に腰を降ろすと兄の方から口を開いた。

『どんなだね、お前の見るところは』

『さあどうだか』

五六は格別興味がなささうに答へた。

『俺の見るところぢやあかにしには碌な質物がないから大したことはないと思ふが……』

『さあ、でも赤毛モスリンや大道電氣なんかの株ならものを言ふでせうし、外にも多少見込のあるものがあるといふぢやないですか』

『駄目だ、駄目だ』

兄の眼には理解しがたい光りが浮んだ。その言葉はそれ等の事業が駄目だといふやうにも取れたし併合されては駄目だといふやうにも解せないこともなかつた。五六は解釋に困つたので默つてゐた。そして兄が何か續けて言ひ出すのを待つてゐた。

が二六は沈默を續けた。顏全體に不氣嫌な色と眉間に深い皺が浮んでゐた。例の狂的な光りがボンヤリと眼にあらはれた。

年が違ひ過ぎるセイもあつて二人の間は兎角疎遠であつた。五六は餘りに勤めに忠實過ぎる兄を餘り好かなかつた。

一昨年の春『あかにし』に何時まで食ッついてゐても首の上りさうにない二六としては確かに出世である筈のある銀行の支配人の口があつたのに、而も五六に相談を持ちかけまでしたにも拘はらず、お家大事の氣持ちからフイにしてしまつた兄であつた。

現に今運び込んだ柳梱にしろ、入口にゐた守衛に運んで貰つてもいいものを、重役の前だからと言つて給仕か何かのやうな眞似をする。五六は兄の風采物腰のすべてに卑屈な奴隷根性が滲み込んでゐるやうな氣がした。すくなくとも五六と兄との間には、資本主義の純然たる影響下に置かれた自由主

義的サラリーマンと封建的遺風失せやらぬ隷屬的腰辨の違ひはあつた。五六は兄と會ふと何かしら優越感を覺えるのであつた。

が眼の前にゐる兄は寧ろ憐憫に近いものを感じさせた。それは半年足らずの間に十年も老ひ込んだかと思はれる位頭の毛が薄くなり目に見えて衰弱した兄だつた。

隣りの部屋で遽かに話聲や物音がしだした。祝盃をあげ終つた錢甕專務が他の行員を從へて五階の物産から降りて來たのであつた。それと同時に二人の『あかにし銀行』員は重役たちを殘して此方にやつて來た。兄が廊下に出て行つた際に、五六にいつか『あかにし銀行』に兄に會ひに行つて顏だけは知つてゐるそのうちの一人に訊いた。

『へンなことを言ふやうですが、僕の兄は何處か惡いのぢやないでせうか』

『さあ何處が惡いといふことはないやうですよ。或ゐは神經衰弱かも知れませんね』

隣室の會議は中々終りさうもなかつた。五六は兄を誘つてお茶でも喫みに行かうかと思つて廊下に出て兄を探した。が色々探して見たが何處にも見えない。會議室を覗いて見たが居ない。五六は一旦もとの室に戻つて來たがフト思ひ出して屋上に行つて見た。

六階までエレベーターで上つて、其處からとん〳〵コンクリートを踏んで行くと、上から恰度降り

て來た人影と突きあたりさうになつた。それが兄だつたので五六はギョッとした。

6　祝　盃

女房のすみは今夜も待ちぼけを食はされた。

三重銀行が『あかにし』を救濟することになると、五六は『あかにし』の祕密裡の內容調査で奔走させられた。それがすむと今度は株主廻りで急がしかつた。

五六はまるで自分が『あかにし銀行』を救濟するかのやうな得意さだつた。すみも五六が銀行の公用で急がしいことには不服はなかつたが、毎夜のやうに十二時、一時にならなれば歸つて來ないのには氣を腐らした。一昨夜は三重物產の大鳥が今度『あかにし』の頭取になるについて、その運動員一同に御馳走があつたとかでたうとう歸つて來なかつた。

五六の遊びはじめるのはいつもそんなことからだつた。重役と上役の景氣にうかされて、宴會などに御相伴にあづかるともう自分も資本家にでもなつた積りで遊びはじめるのであつた。去年の秋五六が待合遊びをした打擊ですつかり破壞されてしまつた家庭を、どうにか立て直さうとして幸ひ五六も落着いたと思つてゐた矢先の事で、すみはしきりに不吉な前兆のやうなものを感じてゐた。

『磯貝さんお願ひしますよ』

八時が打つとすみはチャブ臺がはりの机の上の食器を片づけて風呂へ出て行つた。

押入から五六のどてらを引き出してだらしなく着込んだ磯貝はゴロリと寢そべつた恰好で、この頃流行してゐる『新英雄論』といふ或る自由主義者の代議士の著書を讀んでゐた。氣に入つた文句を見つけると彼は其處に鉛筆でサイド・ラインを引いた。それは磯貝の癖で、手紙の中なんかに引用してひけらかすためであつた。

この自由主義的な英雄論は、金融資本主義の鐵壁に突ッつかつてハタと行詰りブルジョアジイとプロレタリアートの烈しい挾擊に出會つて、沒落するか、それともプロレタリヤ階級に流れ込むか、その瀨戸際に立たされたサラリーマンにとつては一の救ひ手として又曙光として感じられた。多數のサラリーマンの耽讀によつてこの著書は忽ち數十版を重ねた。

間もなく襖の蔭に寢かされてゐた三つになる子供の肇が眼を覺した。肇は母親の居ないのを知ると聲をあげて泣き出した。

磯貝は立つて行つて、無造作に自分の膝の上に抱き上げ、亂暴にゆすぶつた。肇は泣きさへすれば母親のところへ連れて行つて貰へると思ふかしていよいよ烈しく泣いた。が餘りに亂暴にゆすぶられ

るものだから、一寸泣くのをやめて不審けに磯貝の顏を見た。

「アバババ、バアー」

磯貝は今度は子供を寢かして搖りはじめた。子供は泣いてゐる合間々々短くキャッキャッと笑ふ。磯貝は一生懸命搖り續ける。キャッキャッと笑ふ間が段々永くなつて、泣く間が反對に短くなつて行つた。

磯貝は今度は犬が仔犬をあやすときのやうに、子供を彼方此方に亂暴に轉がしはじめた。了ひに子供は泣くことは全然忘れて何か片言を言ひながらキャッキャッと笑ひ續けた。

亂暴に取扱はれることを子供は喜ぶものだ。磯貝は度々五六の家に居候してゐる間の子供を相手の留守の經驗からそのコツをよくのみ込んでしまつてゐた。すみは女らしい氣持ちから、いつもノンベンシャラリンと食客して居る磯貝には眉を顰めんばかりだつた。

が磯貝の方では數年前木材屋の番頭をして多少金の自由のきいた時分に五六に融通をしたといふ樣な腹があるので、いつも失職するとすぐ轉け込んで來た。彼は五六の世話である小銀行のボロを繕ふための商事會社に通つてゐたが、恐慌が始ると眞ッ先に銀行もろとも潰れてしまつて、手當はおろかその月の給料も貰はずに拋り出されたのであつた。もう彼が五六の許へ轉け込んで十日ばかりになつ

てゐた。

磯貝と子供の肇がチンコロのやうにキャッキャッとふざけてゐるところへ、電車のなかで一緒になつたと言つて、五六と金倉、石井の三人がやつて來た。

「おい磯貝、お茶でも入れやうか」

今夜も一杯氣嫌の五六がいい氣持らしくさう言ふと、磯貝は氣輕に腰を上げて臺所へ立つた。

「どうだい、君の方は……」

五六が言ひかけて洋服を和服に換えてゐると金倉は始めた。

「實はそれで相談に來た譯なんだがね。例の男が箱根へ出掛けてしまつたんで、話が延びてゐたんだが、昨日か歸つて來てゐるんだ。僕の方では有力な人、と言つたばかりでは分らないが淺田生命の宇仁さんさ、あの人に口を入れて貰つてもあるし、今度顏を出しさへすれば金の出ることは分つてゐるんだ。ところで此方も少しはあるやうに見せて置かなければうまくないんで二千圓ばかりの金はあることに言つてあるんだが、其處を信用させるやうにしなけりや拙いと思ふんだ」

「そりやさうだね」

「相手は學校を出たばかりの男なんだから大袈裟なことでなくてもカフェーか何處か何氣なしに贅つ

てやらうと思ふんだがね」
『そりや是非やるといいね』
五六は何時もこの調子の男だつた。そこで金倉は結論を急いだ。
『どうかねえ、君にも一つ肩を入れて貰ひたいと思つてゐたところなんだが……』
五六は手を上げて遮つた。
『分つたよ、俺だつてそれ位ゐのことはするさ、まあ待て！』
五六は立ち上つて襖のかげに行つた。
『お茶が見えないよ、罐には這入つてないよ』
臺所でゴソゴソしてゐた磯貝が叫んだ。
『罐のなかに紙袋が這入つてゐるだらう、よく見て呉れよ、一度分位ゐある筈だよ』
襖のかげで押入をガタピシやつてゐた五六が答へた。
『あつたあつた、ちょつぴりあつた』
五六が中々出て來ないので石井が立つて行つた。
『何をやつてゐるんだ』

蒲團を三枚ばかり押入れから疊んだまま引き出して積み重ねてある。それにすみのただ一枚の銘仙のよそゆき。
『今の話のかね』
『さういふ譯ぢやないがまあ兎に角景氣をつけやうぢやないか、まあ待ち給へ、金は廻りものさ、俺はこの頃とても急がしいんだ、まあ待て、そのうちうまいことがある』
五六は言ひ言ひ押入の中に半分潜り込んで大きな風呂敷を持ち出した。
石井は心配げな眼をした。
『細君が文句を言ふぞ』
五六の顏はまだいい色をしてゐた。
『かまはないよ、蒲團は二枚あれば澤山だから……磯貝のは別にあるんだ、心配無用さ』
通ひつけの質家はすぐ近くだつた。石井はその大きい包みを背負つて立ち上つたと思ふと、すぐ參つてしまつて、包みは脊負投げそのままにドシンと音がして石井の背中から滑り落ちた。
『おい磯貝、一寸、お茶なんか後だ。助け舟だよ』
とその瞬間、表ての戸が開いてすみが風呂から戻つて來た音がした。

金倉と石井は急いで茶の間の方に戻つた。五六は蒲團を一枚々々押入に戻した。

『どうかしたの』

風呂の道具を胸に抱いたまま這入つて來たすみは其處から中を見廻はすやうにした。

『いや、何でもないんだ、一寸探すものがあつてね』

それから二時間の後、四人は銀座通りのカフエー『豹』の二階のボックスのなかに納つてゐた。いや旺んに麥酒をのんでゐた。

五六はあの五六にとつて歴史的會議の夜半年振りで兄の二六と口をきいた。その結果は豫想して居たやうな氣拙いものでなく無言の和解と言へば言へないことはなかつた。五六は先刻手紙を持たせて兄の所にすみを使ひにやつた。五六の所謂和解は幾枚かの紙幣と一緒に手紙の中に封入されて來た。

カフエー『豹』といふ名は何とか言ふ不老長壽の麻藥を發明した男のつけた名で、それは豹のなめらかな姿體と柔軟性とから來るエロテイシズムだとのことであつた。

それかあらぬか、卓から卓を泳ぎ廻りボックスの港々に碇泊する女たちは、金紗とかお召とかを肉にピッタリと豹の心意氣で着こなしてゐた。ボーイは飽息(あくび)をかみ殺し、レコードを流れるジャズは女たちとお客との會話をかきまわし、サラリーマンはポケットの中に突ッ込んだ指の先で銀貨の數を暗

誦してゐた。

見渡したところ、なんとサラリーマンの澤山居ることか。

而もそのサラリーマンの十中の八九は『お摘みものは』といふ女の言葉を輕く受け流し、ヂョッキーを明けるのに苦勞するやうに見せかけてゐた。

銀行會社の重役たちの金言『最小の勞力、最大の效果』は『最小の消費、最大の效果』に飜譯されて、自由競爭時代から獨占時代に這入つてこの方、地位も名譽も金も得ることが出來なくなつた彼等は此處でのみは我れ顏に、柔軟な豹の姿體と微笑と媚をかき集め、東京行進曲、かつぽれ、博多節、君戀し等々とありとあらゆる唄をうたひ唸つた。

五六たちのボックスの横の卓では若い男が中年の男に話してゐた。

『かういふ風に燐寸の棒を二つに折つてだね、女の前に出す、女はそいつをひろい上げて何方かを返して寄越す、それが硫黄のついた方であつたら（承知しました）といふ返事と思へばいい、今度は場所だ。そこいらのテーブルの花を指差して、それがグラヂオラスであつたら（そのグラヂオラスは何處の花屋だね）とか何とかやる、女は（新橋驛とか東京驛）とか何とか小聲で答へる、とまア かう言つたやうな譯さ』

『なァんだ、そんなことなら本にでも書いてありさうなことぢやないか』

而も恰度その時、特別なお客を通す奥まつた一室では、姉妹カフエー淺草のナショナルと一緒にこのカフエーを經營してゐるアサヒ物産の一支配人が、御馳走に連れて來た眞面目な甥の大學生にこんなことを喋つてゐた。

『世間では兎や角言つてゐるらしいがあれは出鱈目さ、此處ではそんなことは絶對にない、女給は大部分棲込なんだ。このうしろの方に立派な寄宿舍がある、第一、月に一度しか外出を許さない、一度でもそんな事があれば追ッ拂ふことになつてゐる、そりや嚴格なものだよ、そのかはり此處は料理がうまい、まあ大いに食へよ』

がその實このアサヒ物産の支配人は、洋行歸りであるところから、商賣上の外國人が來れば必ず案内役に立つて、どの女でもお望み次第毛唐に世話するのであつた。これは毛唐との商談をうまく進捗させる手段でもあるにはあつたが……。

五六たちは釣瓶で井戸水でも掬むやうにドンドンチョッキーをあけた。それに連れて金倉の軍用資金にやる筈の財布の底もなけなしになつて行つた。

7 やあ兄さん

三重銀行にコールを引き出された臺北銀行は起つ能はざる打擊を受けたので、この恐慌の激化を防止する手段は政府としても一つしか無かつた。

四月十七日、若月内閣は臺銀救濟案を提げて死命を決しやうとした。今やより支配的な金融資本と融合する途を急いでゐる國家資本を背景とする樞密院は無造作に政府案を一蹴した。その時若月首相以下の面々が悲壯な面持ちで宮中東留の間を出た光景はブルジョアどもの目には大いに氣の毒であつたと言ふことだ。

若月内閣はその日のうちに總辭職した。

翌十八日臺北銀行は本支店一セィに休業した。

全國の預金者はあはてふためいて猛烈なトリッケ騒ぎを捲き起した。

東西の各銀行が軒を並べてゐる京都烏丸通りと四條通りとの交叉點に近い華族銀行支店は、臺北銀行と一緒に休業した近江銀行と向ひ合つて居るだけに、その前は群衆の海だつた。

政友會内閣は組閣に手間どつて財界安定に手をつける暇がなかつたので、預金者の不安、隨つて銀

行員等の不安も刻刻に募り、陰鬱な取付の嵐は、黒い影を投げながら阪神から中國へ、中國から四國へ、四國から九州へとのびて行つた。

宮內省御用金庫として信用の篤かつた華族銀行としては始めて取付の襲來だつた。そこであらゆる擔保物を關西に運んで取付に防戰したが及ばなかつた。嵐は二十日になると本店にも襲ひかかつて來た。東洋信託その他からあらゆる質物をかきあつめて午後四時ヤット二百萬圓の交換尻を決濟したが二十一日には遂に店をしめた。

臺北銀行の休業についで、華族銀行のこの不始末は東京市中のすべての銀行に波動した。大小銀行の悉くはあらゆる質草を戴んで日本銀行にかけつけ、非常貸出を仰いだ。

日本銀行の地下室からはエレベーターがひつきりなしに紙幣のギツシリ這入つた茶箱ほどの箱を幾つも載んで地階から地下、地下から地階へと往復して居た。

正面玄關には絶えず自動車がやつて來てその箱の幾つかを運んで行つた。外の自動車からは、柳梱や鞄を提げた銀行の重役連が大急ぎで降りて建物の中に消えた。

三百六十五日の間一日も缺かさず午後四晩になると判で捺したやうに鎧戸が降り、やがて森閑とした夜の底に沈んで行く玄關の戸も夜更けになつても降ろされず、ひきしまつた面持ちをした銀行の重

役、所謂財界の名士、新聞記者などがしきりに出たり入つたりしてゐた。階上の一室ではそれ等重役連がカラ意氣地のない戰々恟々たる面持ちで、日銀の幹部達が彼等の質草の値踏みをするのを待つてゐた。

印刷局のミシンは百パーセントの印刷能力をあげて狂氣のやうに二十四時間廻轉してゐた。

日銀の若い行員たちは貨車のなかの紙幣の箱の山の上によぢ上つて、各驛から地方行の列車の發つごとに出發した。青白い皮膚の彼等は毛布を持込むことを忘れなかつたが、それでも風邪をひいて了ふのであつた。

日本銀行の發行高は二十六億六千萬圓に及んだ。百パーセントの印刷能力も紙幣の瀧のやうな流出には追ひつかなかつたので、二十五日の官報は子供のオモチヤのやうにお粗末な二百圓、五十圓の新紙幣の發行を公布した。

全國到るところの銀行の前には取付者が一丁も二丁もの長さに堵列してゐた。預金者の間には三月恐慌にもまして種々雜多の悲劇が起つた。三十の銀行が休業した。その資本金一億八千萬圓に上り、預金總額は八億圓に及んだ。日本銀行は二十億九千五百萬圓の貸出しを行つた。政府は全國銀行の一セイ休業を斷行し次でモラトリアムを布いてヤット恐慌を喰ひとめた。

この期間が三重の飛躍期であつた。

先づ森々木の商權奪取から始めて、十數社の工業會社と數行の銀行をその支配下に置くべく活動した。『あかにし』の乘取りはその投資會社である赤毛モスリン以下數會社を手中に收める豫備行動であつた。

三重は一氣に『あかにし』を乘ッ取らうとして、先づ物産の番頭大島を頭取に擬して委任狀の蒐集をはじめだ。三重に救濟されると決つたときに、涙を流さんばかりに喜んだ赤西昌三も、これを知ると默つては居なかつた。株主一同に對して三重の横暴を責めた手紙を送り、全行員をあげて權利個數の蒐集につとめた。

五六は兄の二六も自分と同樣委任狀の蒐集に奔走してゐるに違ひないと思つた。がそれは銀行同志の爭ひであつて兄弟のそれではない……かう考えることに五六は少しも無理を感じなかつた。

五六は兄と自分との性格の違ひを知つてゐた。その違ひが二人の間を兎角引き離すものであることも知つてゐた。學校を出てお互ひが同じ銀行員の生活をはじめると事毎にそれが眼立つて來た。

二六は五六を怠けもののやうに言つた。が五六は兄のやうに頭取の奥さんが便所から出て來たところを手水をとつてやつたり、羽織をぬぎすててあるからと言つて小間使かなんぞのやうな眞似をしたりすることは義理にも出來ないと思つてゐた。いやさういふ兄を輕蔑してゐた。

二六の方では弟が出來もしないくせに無暗に人を世話したがつたり、自分の口が乾上るのに食客を置いたりするのは、弟が柄にもなく高慢だからだと考へてゐた。

そんな具合で、五六が去年の秋待合から救ひ出して貰つてからといふもの、お互ひに氣拙くなつて遠くもないのにバツタリ往復しなくなつてゐた。

それがこの間のことで和解した。別段言葉の上で和解した譯ではなかつたが、五六はひとりぎめにさう思つてゐた。がそれは全然誤りではなかつたが必ずしも當つては居なかつた。

五六は東京商業會議所議員高田八郎の店に委任狀を貰ひに行つて居た。六疊位の部屋を木の衝立で二つにしきつてある。その奥の方に這入つて主人と用談を濟まし起ち上らうとしてゐた矢先、五六は何かギクリとした。

恰度其處へ這入つて來たのが話聲で兄であることが分つた。

五六はぢき、こだはらない氣持ちを取戻して衝立の向ふへ出た。

二六は不愛想な顏でそれが弟であることを疑ふやうに凝と見てゐた。ひどく悄衰した顏だ。

『やァ兄さん……』

と言ひかけて五六は、兄の永い間光りを見ないので退化しかけたやうな小さい眼の色を見ると二の句がつけなかつた。

主人は便所へでも行くのか何にも言はずツイと奥へ行つた。

その瞬間だつた。兄は物言はず弟に飛びかかつて來た。兄の細い腕の何處から出るのかと思はれる力が五六の咽喉を締めて來た。

驚いて五六は兄を突きのけた。

が兄は尙もしツこく恐ろしい力で組みついて來た。

全くそれは三重の大資本の壓迫に對して必死に彈き返さうとする赤西家傳來の力であつたに違ひない。

五六は兄の表情のない鈍い光りの眼を見た。

8　酒詰五六の多忙な一日

丁寧に新聞に眼を通す習慣をもつてゐるものは、四月十五日の東京各新聞の經濟欄の片隅に次のやうな數行の記事を見出したに違ひなかつた。

財界不安に鑑みるところあり東京シンヂケート銀行團が預金爭奪戰の廢止を申合はせたことは既報の如くであるが三重銀行は流石大銀行だけあつて卒先して預金勸誘員數十名を整理した由

この片々たる記事に注目したのは、この事に直接の利害を有する三重銀行員だけではなかつた。

頻々たる銀行取付の流言に業を煮やして、全國の府縣知事に向つて流言取締の通牒を發しさへした山口警保局長は、偶然この記事を見出して實に意外の感に打たれた。

流言犯人は實に三重銀行だつた。(恰度數千人の鮮人を殘酷に××したあの震災の流言がそれを××るべき筈の××から出たものであつたやうに……)三重銀行は預金爭奪廢止を口實に勸誘員を流言の流布に用ひ、また再びそれを口實に整理したに違ひなかつた。

流言は電話で流布された。

それは大がかりであると同時に計畫的で中々尻ッポを摑むことが出來なかた。その勢ひは物凄かつた。東京でも地方でも昨日まで何でもなかつた銀行がそのために取付けられた。警視廳にはしきりに方々の銀行から取締を依頼して來た。

銀行團が勸誘員の派出を廢止した日から警保局長は、これ等暇な勸誘員の群の行動を注意させてゐた。警保局長は自分の圖星が當つたことを愉快に思つた。が內閣が倒れるか否かの瀨戸際に臨んで彼は先づ自分の首の安全をはからない譯には行かなかつた。

三重銀行に於ける預金勸誘員の整理は、恐慌の嵐に吹きまくられて倒れた彼方の銀行、此方の會社の無數のサラリーマンが、退職手當は愚か身元保證金さへ貰はずに殘酷に失業群の中に追ひやられる日日の事實などは、向ふ岸の火事の積りで、財界の嵐の無風帶のなかに、いい氣持に浸つてゐた三重銀行の行員たちの間に、一抹の不安な影を投げた。

階級意識などは藥にしたくも持合はせず、自分等の路は資本家に通じてゐて、うまく鰻上りに上つて行きさへすれば專務にでもなれると考えてゐる彼等は、無論この整理が何を意味するか了解することが出來なかつた。がこの整理は再び近いうちに行はれるといふ事が何處からともなく彼等の耳に這入つて來た。それは今度の卒業期に多數採用された中學程度の卒業者のために著しく人員過剩を感ずるやうになつたからだといふことだつた。

酒詰五六もその不安を感じはじめた一人であつた。

彼は今年新しく採用された行員見習が去年や一昨年に比して非常に多いのを知つてゐた。割合からすれば大學程度の卒業者がいつもの半分程に過ぎず、中學程度卒業者がいつもの二倍以上の數に上つてゐた。それに今年は保險會社の徴收課か電話交換局かのやうに、何處に使ふのかと思はれるほど多數の女事務員が採用された。

五六はこれ等三樣の新行員をそれぞれ別別に會議室に呼び集めて、錢甕專務が試みた訓辭の中の、中等學校卒業者の一群に與へた一節を事每に思出さない譯には行かなかつた。

……今日の實業界、いや銀行界では商業學校、實業學校の卒業者が多數入用であります。今日では大學卒業者といふものは必要でない。何故なら大學生は機械的能力が低い、今日の銀行が皆さんに要求するのは機械的能力であつて、經營上の才能ではない、機械的能力そのものである皆さんこそ今日のサラリーマンであります。知識があり過ぎるといふことは仕事の邪魔になるものであつて、假令ばこの頃のサラリーマンが兎角自分を『統計作製機械』であるとか、『數字印刷機械』であるとか自ら卑下して言ふやうに、一生ルーラーばかり轉がしてゐても詰らないとか、いつまでサラリーマンでも馬鹿らしいとか、其處に色々な不平が出て來るのであります。自分の天職をないがしろにするものは兎角餘計な議論ばかり言つて、實際の仕事の下手な大學卒業者など

に多いのであります。ところが今日の學生諸君は兎角最高學府に這入りたがり、學校もまた無暗にむつかしい學問をさせ、試驗のために頭をいためて發狂したなどいふことをよく新聞などで見受けるのであるが、これはまことに馬鹿らしい話で、若いものの思想を惡化させる政府の間違つた方針に依るものと言はざるを得ません。社會主義者と入學難と知識階級就職難の製造所である大學などは、一つ二つの外皆よして了ひ、中學校も皆商業學校、實業學校に變更して了へば就職難であるとか入學難であるとか、思想惡化などの問題は一ペンに片づいて了ふのであります——ハイ。

酒詰五六が數字を書き入れる手を休めて、またしてもこの訓辭の一節を思ひ出した瞬時、支配人のところからせはしい樣子で自分の卓に戻つて來て何か凝と考える樣な何時もの癖を見せてゐた課長がフト五六の方を振り返つて目くばせした。五六は立ち上つて其方へ行つた。

『一寸支配人が……』

五六は支配人の方に方向を變へた。

支配人はその女のやうにイヤにブクブクした手を上げて脂の浮いた鼻の横を小摺つた。

『君に一寸聞きたいんだが……』

五六はヒャリとして耳をそばだてた。陶器製のメモでトントンと卓を叩いて支配人は續けた。

『錢甕專務のことで何か君は言ひはしなかつたかね、間違つたら困るが君が何かそんなことを言ひ出したといふ噂さなんだが……』

『さあ、どんなことでせう、何も別に記憶はありませんが』

『さう言はれても困るが……專務も多少氣にして居るらしいんでね』

五六は例の專務に關するタイピスト諏訪利子の話を思ひ出すとその性分として嘘は言へなかつた。

『僕から言ひ出したといふのは間違ひでせう』

『君は誰からその話を聞いたんですか』

支配人はその太い短い頸を窮屈さうに曲げて五六の顏を覗き込むやうにした。

『さあ、それは一寸、それは私として言へません』

五六は自分の最後の一言が、支配人に言質を與へるやうな結果になつたことを不愉快に感じながら支配人の前から引き退つた。五六の胸は言ひ樣のない重苦しさで一杯になつた。第二次の整理か眞ッ先に自分の頭上に落ちて來たやうな氣がするのであつた。其處へ給仕の少年が勢ひよく駈けて來た。

『十一番の應接に面會人です』
五六は一階に降りて行つて動物園の檻のやうに並んだ第十一番目の『使用中』といふ札のかかつた應接に嫂の市子の姿を見出した。
『昨日入院させましたの』
市子はニコリともせずに言つた。
『昨日電話ででもお知らせしやうと思ひましたが、あの人はまるであなたを仇かなんかのやうに言ふものですからね、突然來て頂いても却つてどうかと思つたので……』
『わざわざ來なくても電話で結構でしたよ』
五六は思ひなしか市子が心配で痩せたやうな氣がした。
同じ休業同志の中山、村上、上下田、大澤、五十八の組織した團體の中に這入つて、預金者とも打合せて、政府、日銀等に救濟運動中であつた『あかにし銀行』は、一方三重銀行との交渉が進展して、あの三重銀行樓上での會合で首尾よく手打ちすると、他の休業銀行よりも一足先に失敬して、四月中旬に兎も角も店を開けた。
三重銀行が『あかにし』を救濟して自己の支配下に收めたのは、赤毛モスリンその他二、三の會社

を手中に收める豫備行動だつた。その點ある事實關係から內容が堅實であるといふので溫情的に救濟した單なる商業銀行たる大久保銀行の場合とは違つて、一旦その翼の下に收めた以上專制的な支配權を揮ふことは分つてゐた。
『あかにし』は最早その私財の悉くを整理に投出してしまつた赤西家のものではなかつた。事實三重銀行はその日から猛然と『あかにし』の咽喉に襲ひかかつて來た。
赤西家のために十五年間のあらんかぎりの忠誠を盡して來た酒詰二六に取つて、このことは手きびしい打擊に違ひなかつた。この數年間、彼の眼の先に絶えずチラついてゐた支配人の椅子はスーと消え失せてしまつて、恐ろしい暗闇が彼を脅やかしはじめた。
あの三重銀行の會合の夜以來二六の樣子は何處か變つて來てゐた。今箸を置いたばかりなのに、またすぐ飯が食ひたいと言つて何う云ひきかしても承知しなかつた。癇癪を起すと手あたり次第のものを投げつけた。かと思ふとフラリと外に出たまま夜更けになつて疲れ切つた樣子で誰の家を訪ねたでもなく何處に遊びに行つたでもなく歸つて來た。
痩せ方がひどくなり、眼の光りが變つて來た。『あかにし』が店を開ける樣になつて委任狀の蒐集戰がはじまると二六の症狀は一層目立つて來た。

ある日偶然に其處の本箱に『興信錄』か何かを探しに行つた給仕は壁際にテーブルを引き寄せ椅子を積んだ上に乘つた二六が、傲奢な額緣の中の先代赤西吉左衞門と一生懸命に握手を交はしてゐるのを見て、驚いて駈け戻つて支配人に報告した。

二六は三重を憎んだ。いや二六は弟をさへ仇敵のやうに考えはじめたらしかつた。彼は屢々市子に向つて赤西家を陷れ自分の將來を遮つたものが五六そのものであるやうな口吻を漏らした。三重銀行や錢甕專務を口を極めて罵りはじめるとそれがキット五六にまで及んだ。

五六と市子の間に置かれた——要談は五分間以内に願ひます——と書いた木札を手でいぢくり廻はしながら市子は續けた。

『今日はね、何を言ひ出すかと思つたら、五六とは絶交だ、五六とは絶交だつて言つて居ゐの、絶交なんてまるで友人みたいね、兄弟らしくないわッて言つても、矢ッ張り絶交絶交ッて言つてゐるんですよ。それがまた素晴らしく大きい聲でよ』

『弱つたですね、歸りに兎に角寄つて見ませう、何大丈夫ですよ』

市子が歸つて間もなくまた給仕が五六のところへ飛んで來た。

『女の方から電話です』

病院に戻つた市子からか、それとも赤坂の待合『あかね』で馴染みになつた胡蝶からか、その孰れかを期待しながら二六は受話器を耳にもつて行つた。するとそれは女房のすみだつた。

すみは始めから終りまで一息に喋つた。

『大變なの、今日お晝頃石井さんが來たから、私留守をたのんでお風呂に行つたのよ。そして歸つて來て見たら石井さんが見えないから變だと思つて見たらどうでせう、蒲團がないのよ、蒲團が、敷蒲團もかけ蒲團もなくなつてゐるのよ、まさかいくらなんでも蒲團をと思つたけれど、お隣りへ聞いて見たら、いつもあなたの家に來る人が擔いで行つたから、まさか私に默つて持つて行つたのだとは思はなかつたといふのよ、それから私山田に行つて見たの、ちやんと入れてあつたわ、(若し〳〵)困つたわね、どうしませう、蒲團を持つて行くなんてひどいわ、それよりもあの金倉の奴、別莊會社だの二千圓だのと言つて、たうとう何にも出來なかつたのね、(若し〳〵)』

五六は心の中で(なんといふイヤな日だらう)と溜息を漏らしながら電話から放れて了つた。

9　ドリツク・スタイルの圓柱

三重銀行と三重物産とを含む三重ビルデングは、有史前のギリシヤに於けるドリアン民族の建築樣

式であるドリック・スタイルの豪莊な圓柱を林立させて、そのあたりの比較的大きい建築物の群のなかに傲然と臨んでゐた。

この神嚴な圓柱を林立させたドリック・スタイルといふ建築樣式は銀行の基礎の鞏固さと堅い信用とを表象するといふので大銀行の好んで用ひるところのものであつた。が帝國主義日本の代表的大財閥三重の場合では、それは單にそれのみではなく、日本の資本主義經濟に於ける決定的な優勝を誇らかに表現するものの如くであつた。この尨大な建物は地下に沈んだ三階と、そのゆるぎない基礎工事を合はせると、地上に聳立した七階よりも地底にかくれた部分が遙かに大きかつた。

夥しい數の中小銀行と大銀行すらもの倒潰と全國的取付に依つて收縮され、小數の大銀行へと逆流し始めた預金は三重銀行の地下の大金庫へ滔々と流れ込んだ。

二十年間紙幣を算へ續けて一度も間違つたことが無いといふ一出納係は、夥しい紙幣の山の中にうづもれながら、三重銀行のこの魔術を疑はふともせずに、依然として皺くちやな一圓紙幣のやうな無感覺な顏をして、熱心に紙幣の垢でその細い指先を汚してゐた。而も彼の足もとには、彼の親しい友人の同じ出納係が、二六時中紙幣の海に溺れながら、月末にはその給料袋から五、六枚の紙屑を摘み出すことに滿足しなければならないことに烈しい懷疑を感じて、それを嚥んで自殺したピンク色の昇汞水を滿えた洗面器が置いてあつた。

一階の大時計の針が午後四時を指すと、地下室の大金庫の四方に溪流のやうな音を立てて水の流れ込む音が、地下室の何處の隅に居るものの耳にも響いて來た。

防火設備の完全に備つた金庫室は、鐵筋コンクリートの內部に二重三重の鋼鐵板を張りめぐらしてその厚さが十五吋もあつた。その扉に至つては盜賊などが如何なる道具を用ひても破壞出來ないやうに出來てゐる上に、夜中何物かが扉に觸れるや否や宿直室に通ずるやうな電氣裝置をしてあつた。

ブルジョア經濟社會にあつては、その建築樣式と共に金庫の完全な設備もまた銀行の信用を約束するものだつたので、三重銀行はこの金庫室の外觀を撮影してあらゆる廣告に用ひ、繪葉書にして東京市內の繪葉書屋の店頭にさへ出した。『最新廣告術』の著者が、その廣告術の一項にこの方法を書き加へたのは、少しも彼自身の創意によるものではなくて、三重銀行の實驗に敎へられたに過ぎなかつた。

爆破的恐慌の破壞的影響は無數の中小銀行、商工業者を恐慌の波に押し流し、村田、本郷、壽々木赤西、上下田、松本その他の中小財閥を打ち倒し、これ等の銀行資本に支へられてゐた諸工業は小數の金融資本の支配に歸した。

この奪ひ合ひの闘爭の中で著しい飛躍を遂げた金融資本の中にあつても、會社資本二十五億の資本網を有し、實際價値より見て日本全國の會社資本總額の二十四%を支配し、一ヶ年の取引高十五億に及ぶ物産を本營とする三重財閥は壓倒的勝利を占めた。

數年前、大貿易商垢田商會が戰後の反動で破綻に瀕した時、これを救濟しやうとしてゐた大藏大臣は大事な時になつて突如救濟を放擲してしまつた。その背後には財閥三星の手が動いてゐた。政府の救濟を唯一の望みにしてゐた垢田商會はたうとう倒れた。その垢田商會の所有してゐたアメリカのウエスチングハウスの旋風機、飛行機その他各種のモートル機械の專賣權は、この破綻のどさくさに乘じて遂に三星に奪取されてしまつた。財閥三星はウエスチングハウスの商權を得るために大藏大臣を通じて垢田商會を壓迫して倒潰せしめたのである。三重もまた三星のやうに壽々木商會を一氣に押し倒して數十種に上る外國商品の專賣權を連日連夜の活動で次等にその手中に收めて行つた。

それは單に貿易のみに止まらなかつた。帝國製粉、日本炭礦、大日本樟腦、日本モスリン、大和製紙その他夥しい會社工場が三重の支配下に降つた。かうした恐慌の嵐のなかに、壓倒的財閥三重はいやが上にもオシ倒しへシ倒しての飛躍を遂げた。がその足もとから夥しい失業群が溢れ出した。

大戰中の資本主義の飛躍時代には、勞働者が攻勢に出て、ドンドン爭議を起し勞働組合を發展させた。が戰後不景氣になると工場は閉鎖され、機械は動かなくなり、賃銀は下るで、今度は反對に資本家の方から勞働者階級に向つて攻めかかつて來た。

この傾向はこの恐慌で一段と深められた。機械は運轉を休み賃銀は下げられる。彼方此方の工場から勞働者が街頭に投げ出された。資本家は新らしい技術と、新しい機械と、出來るだけ少い勞働者と無駄を省く方法で、工場を經營することを考えるやうになつた。

日本紡績聯合會は操業短縮を開始すると同時に『より少い勞働者の血の出るやうな搾取』の實行に向つた。工場閉鎖、賃銀引下げ、不當解雇、組合の破壞、すべて資本家の挑戰は、勞働者の憤怒を呼び、爭議をかり立てた。金融資本はその飛躍に依つて胎んだ勞働者、インテリゲンチャの失業大衆に依つて、最後にそのあがきをとめられるであらうところの途を一歩前進した。

嵐の中の大樹のやうに、周圍のものを壓しつぶし押し倒しながら倒れた壽々木合名及び商會は、四月下旬、八百名からのサラリーマンを身元保證金も返濟せずに街頭に投げ出した。華族銀行、上下田銀行その他多數の銀行會社もそれが破綻と同時に多數のサラリーマンを飢餓の中に叩き出した。無數のサラリーマンの群は數十萬の失業群の海の中に幾筋の川となつて滔滔と流れ込んだ。

恐慌の嵐が吹きはじめた時、口々に『いやになつちまう、こんなに急がしくては……』などと愚痴

をこぼすだけで、盲目なその日暮らしをして居た彼等も、流石にあはてざるを得なかつた。

日本の資本主義が最早獨占の時代に這入つて次で行き詰つて了つて、大資本は既に彼等の才能も、知識も、手腕も、必要としなくなつて居るにも拘はらず、サラリーマンの大多數は、未だに古典的な自由競爭時代の夢を抱いてゐた。

大正九年以來高められた銀行合同の過程は、この恐慌で特に飛躍的に遂行された。このやうな合同、併合、獨占化の過程は支配人とか重役とかの地位を得る機會をいよいよ少くし、それは少數の金融資本家、及びその番頭の占めるところとなり、サラリーマンの立身出世は愈よ望みなくなつた。

行員の方では一かど銀行の經營に關與して居る積りでも、重役の方では彼等の仕事が單なる簿記生や給仕の仕事と違つて居るとは思つて居なかつた。一方は合同、併合、沒落によつてサラリーマンに對する需要が刻刻減少することから、他方は小資本家、中間階級がその地位を保つことがむづかしい爲めにその子弟に競つて高等教育を與へサラリーマンに育て上げることから、サラリーマンの地位は益々困難を加へるばかりであつた。

デパートメント・ストアや樂器店や保險會社やその他諸々の會社、商店は大學卒業者の大群の中のホンの一部を小僧として迎へた。決してそれは二十年前のやうに『將來の有望なる社員』としてではなく同じ給料で使へるなら無教育の小僧より教育ある小僧の方がいいといふに過ぎなかつた。

大學、專門學校卒業者の就職率は大正十二年の七割二分からこの年には五割に低下した。そして益低下する一方であつた。數年前既に安田保善社の常務は大學卒業生を採用しないことを聲明した。

ピラミットの頂點を辿つて行く金融資本の躍進は、サラリーマンの需要を寧ろ增加して行きながら、而も經營者、高級技術者の必要を愈よ少くした。

必要なのは機械的能率の高い賃銀の安い勞力——中學程度卒業者と女事務員であつた。完全な簿記生としての商業學校生と、目をつむつて算盤を彈く職業技術をもつ女事務員の登場は、帶に短く襷に長い大學生を『舊時代のサラリーマン』の位置に蹴落さうとしてゐた。K大學はあはてて簿記、珠算專修科を設け、各大學は商業實務專習所を開いて、金融資本の求める『機械的能率』の點で商業學校にヒケをとるまいとあせつた。

一重役が新社員の採用に當つて手帳に書きつけた次の覺書は、彼等の大學卒業者に對する要求は少しも切實な要求ではなく、氣まぐれに近いものであることを證據立てた。

金持でないこと（それは機械的勞力を持たぬ）

貧乏人でないこと（それは不健全だ）
両親のあること（何方が缺けてゐてもいけない）
苦學生でないこと（榮養不良、危險思想を警戒せよ）
才能のないこと（才能は機械的能率の敵である）
平凡人（彼こそはサラリーマン）
受驕（言ふだけ野暮、人相の悪い不愛相な男は刑務所に送るべきだ）
健康（スポーツマンも悪くはない）

帝國主義戰爭の讃美者であり、金融資本の小僧であり、ブルジョア的映畫のファンであり、思想善導と結びついた野球の熱狂者である、多數のサラリーマンは、恐慌の波に押し流され、不安な波にもまれながら、あるものは古い夢をむさぶり續け、あるものは半勞働の仕事にしがみつき、失業者と、『頭腦勞働者』化したあるものはプロレタリアードの層に流れ込んで行つた。

モラトリアム明けのその日だつた。

取付の憂ひなどは全く無かつたにも拘はらず、三重銀行の窓口に近い支配人の大卓（つくえ）の周圍には、三重の信用を誇示するために、紙幣束が山のやうに積まれてゐた。その紙幣束の山の中に埋つてゐるのは支配人ではなく錢甕專務であつた。が錢甕專務はツアーのロシアの小話のなかの主人公のやうに、

紙幣の山の上に腰かけてピストル自殺などはしなかつた。晝食時間を見込んで應接室で金十錢也で行員たちの血壓を計つてゐた血壓屋がその前に呼び出されてゐた。

「どうだ、我輩の健康は……」

今しがた三人分の晝食を平らげて來た錢甕は、自分の腕に卷きつけられたザンボルン血壓計の水銀柱に眼をやりながら、如何にも快適さうにからだを反らした。

「おいくつでいらつしやいますか」

「六十二だ」

血壓屋は何故か紙幣の山の中で蒟蒻のやうに體をふるはしながら、計器を專務の腕から解きほぐした。

「百五十三、非常に健康で御座います」

「三重銀行のやうにか、ハッハッハッハ」

山と積まれた紙幣束に何氣ないながし目を送りながら、錢甕は、三重銀行の勝利の快い笑ひを笑つた。

恰度そのとき、錢甕と紙幣の山を遠卷きにとり卷いた行員たちが追從笑ひを笑つてゐるときに、酒

詰五六は支配人室で東北支店へ轉任すべき辭令を受けたのであつた。

夕方、銀行を退けやうとする頃、嫂の市子から電話がかかつて來た。

一昨日入院した兄は、市子が病院の近くに買物に出て歸つて來て見ると、何處かへ姿を消して居るといふのであつた。五六は急いで銀行を出て、市子と手を別けて、二六の知り合ひや立ち寄りさうなところを悉く搜したが徒勞であつた。

夜九時頃になつて、五六は念のため「あかにし銀行」に行つて見た。宿直に聞いたが見なかつたと言ふ。が五六は眞ッ暗な廊下づたひに、應接間や重役室を覗いて見たのちに、會議室のスキッチを捻つた瞬間、ガット腦天を打たれた。

萬華燈の光りが照らし出したのは、先代赤西吉左衞門の肖像の額緣を支へた折釘に、紐を結んで、首を吊つてゐる兄の二六の姿であつた。

——一九三九・一一・一三——

指

一

兵舎といふ所は物を匿す場所がないやうに出來てゐる。刑務所の時計臺は同時に囚人の監視臺になつてゐる。製絲工場の便所は女工たちがその中でサボることが出來ないやうに、しやがんだ上半身が外から見える仕かけにしてある。建物には階級がないと言ふのはウソだ。このやうにして兵舎も兵卒たちが物を匿せないやうに出來てゐる。かくしてもすぐ見つかる。言ひ換へれば、『忠良』なる兵士として必要以外のものを持てないやうに出來上つてゐる。

が兵卒だつて生物だ。××なる兵士に必要なものでないからと言つて、將校の氣に入らないからと言つて、持ちたいものはもたずには居られない。假令ば女から貰つたものだとか、××、將棋の駒、聯珠の石、さう云つた細細したものがそれだ。

見つけられたらまづい、が中中いい場所がない。

將棋の駒を持つて來たのは横田だつた。一つの寢臺に寄り集まつて皆ではじめた。

『おつと、金は横に下れないぞ』

『何言つとる』

「金とりだ」
「王手だよ」
「合點だ」
こんな調子で俺の番が來た。
俺より弱い奴なんか滅多にあるまいと思つてゐた。ところが忽ち三人なぎ倒した。四人目になるとどうも旗色がよくない。
「角力の重」のやつ中中強い。三貫目もあるハンマーを樂々と振ることに馴れた、厚まくれたブキッチョな指で、ボソボソやつて來る。その指からこぼれ出す駒は、横ッちよになつたり引ッ繰返つたりしてゐる。
たうとう俺の負となつた。癪だから王手と來たとき、王樣を一つ餘計に動かしてやつた。重の奴氣がつかない。皆クスクス笑つてゐる。
また王手と來た。俺はすかさず逆に「王手ッ」と呶鳴つて、向ふの王樣の鼻ッ面へ角をつけてやつた。
重は何だか腑に落ちない怪訝な顏をしてゐたが、自分の陣營ばかり見てゐて、それでなるほど王樣

が動けなくなつてゐるものだから曖昧な笑ひかたをして頭を掻いた。
——誰かが横から、
「馬鹿、お前の方が先に王手をかけて勝つてゐぢやないか」
皆は大笑ひに笑つた。
俺達は久し振りで愉快に遊んだが、さて道具を保管して置く場所に弱つた。實行出來ないことばかり言つて、ワアワア騒いでゐるが一向うまい考えが出ない。
其處へ酒保で一杯やつたらしい横田がやつて來た。
「何だ、そんなこと譯ないこッた」
彼は首を上に向けた。
「天井板を一枚剝がすんだ、頭の上には氣がつかないよ、第一お前たちがそんなに苦勞しても氣がつかないで居るぢやないか」
皆は感心した。喜んだ。これを實行すること位は朝飯前だつた。忽ち天井板を一枚浮かして先づ將棋の駒をかくした。
「サア、みんな祕密物件を持つて來い、持つて來い、おい山崎、お前の赤い財布を持つて來いよ…」

横田は大はしやぎにはしやいで、皆の祕密物件をドンドンその中に入れた。一番先が山崎の舞妓から貰つた女持の財布、手紙、×××××××××、藝妓のブロマイド、聯珠の石……皆入れてから、剝がした板をもとのやうに蓋して置いた。

ある日の午後、田中聯隊長が檢査に廻つて來た。さあ俺達はビクビクものだ。聯隊長は人の氣のつかないところに氣がつくので常々俺達は恐れを爲してゐたのだ。誰も天井を見上るものがない。その癖天井ばかりを氣にしてゐる。虻川がボカーンと天井を見てゐたので傍にゐた石川が虻川の尻を突ッついた。流石の聯隊長も天井の共同倉庫（俺達はそいつを共同倉庫と呼んでゐた）には遂に氣がつかなかつた。

が聯隊長は窓紐の重りを下げて置く壁の繰抜き穴を覗き始めた。

『この中に何か這入ッとる、引き出して見い』

うしろに手を廻した腰を延すと同時に聯隊長は、副官にではなく班長に言つた。班長は永いことかかつて穴の中からズルズル何か引ッ張り出した。俺達は息を殺して見てゐた。出て來たのは舂先に藝者なんかクルクル頸に卷きつける桃色のフワフワした絹の襟卷だつた。

聯隊長はそれを汚ないものでも扱ふやうに指先で摘み上げて叫んだ。

『これは誰のものか、どうぢやこの中に居らんか』

皆は息を呑んだ。と突然破れるやうな聲がした。

『ハイ、聯隊長殿、私のものであります』

さう言つたのは重であつた。重は直立不動の姿勢で恐ろしさうに聯隊長を見てゐた。

『こんなものを兵營内に持ち込むことはならん』

重は悲しさうな眼をしたが駄目だつた。襟卷は持つて行かれて了つた。

二

兵營から二里ばかりある長濱へ演習に行つた次の日の日曜だつた。金のない外出もつまらなかつたので俺は寢臺にひつくり返つて本を讀むことにした。

午後二時頃になつて高田がボンヤリ戻つて來た。

『何だか身體の調子が惡くつてね、横田たちと分れて來ちまつたよ』

彼は日曜毎に横田たちと遊廓をひやかしたり蕎麥屋やしるこ屋を食ひ荒して歩るく組だつた。俺は半分ほど讀みかけたゴーリキーの『三人』を寢臺に伏せて暫らく話した。

『それはさうと俺も勉強しやうかな、例のフランス文學を貸して呉れないか』

高田はニヤニヤ笑ひながら言つた。高田のニヤニヤはあの時小川中尉が女郎のことを書いてあるんだねと言つたことを思ひ出してゐるらしかつた。

俺は共同倉庫の蓋をあけてそいつを出してやつた。高田は俺と同じに寢そべつて讀みはじめた。

俺は共同倉庫の中にまだ二、三册かくしておいてあつた。カウツキーの『資本論解說』を讀んだのも、その少し前だつた。軍隊では何よりも傳播することが恐れられた。兵營生活は退屈そのものだ。兵卒たちは退屈まぎれに何でも讀む。一册の雜誌があれば紙がヨレヨレになつて表紙が破れて了つてもまだ次から次へと渡つて行く。それが何よりも警戒される。反對にそのやうに傳播される恐れがなければ禁止するやうなことはないのだから、志願兵たちは原書のマルクスの『資本論』か何かでも大ッぴらに讀んでゐる。が邦文のものとなると詰らぬものまで文句を言ふ。いや文句ではない禁止する。このフィリップのビユ・ビユ・ド・モンバルナスでもさうだつた。

俺はそれを持つて週番勤務の小川中尉のところへ三文判を捺して貰ひに行つた。

中尉は女が着物の品定めをするときのやうに、とみかうみしてゐたが、さも得意さうに言つた。(俺だつてフランス文學位知つてゐると言はんばかりに)

『こりや、フランス文學だらう』

『ハイ左樣であります』

俺は中尉がそばの椅子の上に投げ出してある『キング』と、その得意さうな『フランス文學だらう』との對照(コントラスト)に內心苦笑を感じながらそれでも神妙げに答へた。

『ロシヤ文學などとは大部違つとるな』

『ハイ、左樣であります』

『フランス文學といふのは軟文學だらう』

『ハイ、左樣であります』

『これはどうも考えものだね、フランス文學と言ふたら頽廢的なものぢやないか』

『タイハイテキとは何でありますか』

俺は空とぼける必要を感じた。が中尉はすかさず追擊して來た。

『タイハイテキとは不健全なことを言ふんだよ、女にふけつたり酒におぼれたり夜更かしをしたり、凡そ軍人の氣風に合はない氣風のことだ』

『ハイ、左樣でありますか』

中尉はからだを乘り出すやうにした。
『これはいかん、かういふ頽廢的なものを讀んではいかんよ』
雲行きがあやしくなつて來たので俺も默つては居られなかつた。
『中尉殿はヴルレーヌとか何とかを中心にして考えられるから左様に言はれますが、一概にさう言へないと思ひます。これを書いた人はさういふ人ではありません』
が中尉は中中負けては居なかつた。俺も一生懸命だつた。暫らくしてある頁を凝と見てゐた中尉は言つた。
『何だ、これは……女郎のことが書いてあるんではないか』
淫賣婦とは言はず女郎と來た。これには參つた。女郎のことが書いてあるからいかん——の一點で突ッ張られるんで、たうとう負けて了つた。一週間以内に兵營の外に持ち出すことにして部屋を出た。
二週間ほど前の話だが、それから共同倉庫に入れたままになつてゐたのだ。
讀んでゐた高田は一時間ばかりたつて胸が痛いと言ひ出した。
『どうしたんだ』
高田は起き上り、兩足をダラリと下げた恰好に寢蓙に腰かけて、胸をはだけて見てゐた。

『右の方がズキズキ刺すやうに痛むんだ』
『風邪をひいたんぢやないかね』
高田は頭を振つて見せた。
『いや違ふんだ、昨日演習の戻りからどうもへンだつたんだ』
その夜、高田は時々うめき聲をあげてゐた。翌日彼は醫務室へ行つて診察を受け、衛戍病院に這入つた。

三

兵營を出てすぐ前の衛戍病院の横を拔け四五町のところで、奥羽線の踏切を越すと間もなく練兵場だ。其處へ演習に行く途中だつた。
俺達がその踏切を越すと間もなく、うしろで『止れッ』の號令がかかつた。俺達はその分隊を殘してドンドン先に進んだ。ととあとから分隊長の下士が俺達の横をかけ拔けて行つて小隊長に何か報告するのが聞えた。
『何だい、先刻のは……』

練兵場に着いてから皆はその事を話し合つた。踏切に來かかつたときに、坑夫の重がいきなり列から飛び出して行つて、枕木の間から大きな石を拾つて自分の右手の人差指をレールの上で叩き潰さうとしたのであつた。重はとめやうとする分隊長に、ダラダラ指から血の流れるのもかまはず抵抗しやうとしたが、分隊總がかりで壓へられやつと斷念したらしかつた。

『えらい奴も居るものだな』

『氣が強いのにも程がある』

『何で指を潰したんだ』

『大方女が戀しくなつたんだらうよ』

『お前がかい、ハッハッハハ』

坑夫の重は角力が強かつた。中隊でも彼を倒すものは一人も無かつた。鑛山では『角力の重』と呼ばれ坑夫の間でも恐れられてゐるといふことだつた。それで始めは角力の重と呼んだが、此頃では單に『重』と言つてゐた。鑛山では自然發生的な反抗兒で役人どもを手古摺らせるやうな男だといふ重も、軍隊では至極從順な模範兵であつた。その模範兵がそんなことを仕出かしたのだから皆は呆ッ氣にとられた。

その夜、俺は不寢番で起された。半分ねぼけてゐる俺のボンヤリした視野の中で、俺と交代してこれから寢やうと言ふ横田の顏がニヤニヤ笑つてゐた。

『逃亡の恐れあり注意を要す、だとよ』

俺は寢呆けてゐて、何の事か譯が分らなかつたので聞き返した。

『何だつて』

『二等卒吉川重吉逃亡の恐れあり、注意を要す、とさ。分らない奴だな』

ヤット分つたが、何だつてそんなに重が逃亡する危險があるのか俺には分らなかつた。それに横田のニヤニヤしてゐる譯が分らない。皆グーグー鼾の音を立てながら寢てゐる。横田は毛布の中に潜り込みながら話し出した。

重には鑛山に言ひ交した女があつた。女は撰鑛場に働いてゐた。除隊と同時に重と夫婦になる筈だつた。兵營の重には三日にあげず女から手紙が來てゐた。それがこの頃になつてパッタリ杜絶えた。重にとつてよくないことが起つた。鑛山には白粉くさい女が居ない。そのために事務所の學校上りの若い役人たちは坑夫の娘たちに手を出した。鑛山の倶樂部で酒を飲む機會がある毎に、役人たちは、女坑夫や、撰鑛場の娘たちを呼んで酌をさせたり踊らせたりした。娘たちは椿油、白粉、半襟、髮油

さういふものが貰へるのをたのしみに踊りに行つた。重と言ひ交した娘もその仲間に這入つた。そしていつかある學校出の若い役人との間を色々噂されるやうになつた。重の許には女の便りのかはりにその噂を知らせた友人の手紙が來た。

さうなつては重も凝としては居られなかつた。從順な模範兵の重に鏡山にゐたときの『角力の重』の狂暴な感情が起つて來た。が重と言へども脱走となると命がけであることを知つてゐた。そこで重はうまいことを考へついた。重は銃の引金をひく人差指を叩きつぶしさへすれば最早『兵たるの資格』のないものとして除隊さして貰へると思つたのであつた。

『なんて單純な考へ方だらうな、ただ事ぢや濟まないだらうに……』

俺はさう言つたが、話し手の横田はもうグーグー鼾の音をたててゐた。俺は四、五日前聯隊長に女の襟卷を發見されたときの、ヘンに想ひつめたやうな重の顔を思ひ出した。

寒い朝であつた。俺たちは營庭の一隅で繰返し繰返し突擊の眞似をさされてから、枯草の上に思ひ思ひの恰好で息を入れてゐた。日がかなり高く上つたのに、未だ解け切らない枯草の霜がヒヤリと手や顔に觸れた。うしろにはすぐ二棟の營倉があつた。

俺は重のことを思ひ出して居た。彼が中隊に見えなくなつて三日目だつた。重の行爲は稚氣愛すべきところがあつた。が稚氣愛すべきところがあるにしろ無いにしろ世界一の强兵を誇る我が軍國主義にとつては、それは重營倉に價ひするらしかつた。俺は重がその中に投げ込まれて居る筈の營倉を霜の上に縺轉びながら見守つてゐた。

俺達の間をガチャガチャ佩劍を鳴らして歩き廻りながら小野田少尉は叫んだ。

『おいお前等、みんな聞け、若し鼠が火をくわへて火藥庫の中に飛び込んだら何うするか』

なんて愚劣な質問なんだと俺は肚のなかで思つた。が少尉は眞面目なものだつた。

『おい、鈴木言つて見い』

『分りません』

『おい、武田言つて見い』

『何でありますか』

少尉殿はブンプン怒つてもう一度質問を繰返した。

『ハイ、殘念乍ら忘れました』

ドッと笑ひ聲が起つた。

『殘念乍らは餘計だ、教へないものを忘れる奴があるか、猫にバケツをくわへさせて追ッかけさせる

んぢや、分つたか』

が俺は少尉殿の説明は聞いてゐなかつた。俺は營倉の中の物音に耳を傾けてゐた。營倉のなかは板敷になつてゐて寢臺は勿論何一つ無い。全で檻の中の動物のやうに、その中を駈足してゐる音が、ドンドンと一定の調子をとつて聞えて來た。さうでもしなければ寒さに耐へきれないのだ。

四

高田が衞戍病院に這入つて一ヶ月ばかりの後のある日、診療ラッパが鳴ると俺は醫務室に出かけて行つた。

『何處が惡いのか』

と軍醫はたしなめるやうに言つた。

『膝頭が痛んで歩けません』

俺はさも重患のやうに蒼面をつくつて見せた。演習の歸へりの行軍の疲れが拔けないのだ。痛いと云ふ程ではない。ただ壓へられたやうな感じがあるに過ぎない。

軍醫殿は身體を乘出して、俺の膝の方に腕をのべた。

『こつちか、それとも兩方痛むんか』

『兩方であります』

俺は押し强く出た。軍服を脱がされた。軍醫は膝關節を摑んだり膝を折り曲げたり、ためつすがめつした。

『何日からだ』

『昨日からであります』

『どんな風に痛む……』

『ズキズキ疼くやうであります』

中中容易なことでは病院に入れやうとは云はない。

『どれどれ一寸歩いて見い』

俺はそこで重いゴミ車をひく老ひぼれ馬の歩きッぷりで歩いた。

『それ位なら少し位の行軍はかまはん、辛棒しろ』

『軍醫殿、一丁歩くのがやつとであります』

俺は頑張つた。たうとう淋病かリウマチスといふことになつて衞戍病院入りを許可された。俺は扉

の外に出ると同時に思はずニヤリと笑つてゐる自分に氣がついた。俺達の中隊はすぐ將軍野の營舍に移されて十日間ばかり演習の筈であつた。が衛戍病院は食物がいいし寢てをられる、これほどうまいことはない、××××××××××××。

一ケ月見ない間に高田はゲッソリ痩せてしまつてゐた。頰や顎の骨が露はに出てヘンにバサバサした皮膚をしてゐる。高田は寢たなり眼だけ動かした。

「何だ、お前も來たのか、何處が悪いんだい」

「××××××××××。××××××××××」

さう言ふと高田は薄笑ひしたが何だか淋しさうな笑ひだつた。

「どうだ、少しはいい方か」

「餘りよくないよ」

その聲には力がなかつた。

「よくないんだつたら、どうかせにやなるまいが」

「それがね」

高田は毛布を拂ひのけて起き上りベットの緣に腰かけて續けた。

「中中おいそれと出して呉れないんだ、親父からも、出て來い、出て來い言ふて來るが……第一軍隊の中に寢てゐるといふことがいけないんだ、それに軍醫がヤブと來てゐるからたまらないよ、外へ出たらグングンよくなると思ふが、軍醫のやつ、今によくなるよくなるで出して呉れないんだ」

高田は喋りながらヘンに昂奮してゐた。高田の家は自作農で富裕とは行かなかつたが小商ひもしてゐたので食ふに困ることはなかつた。無理をすれば轉地も出來ないことはない。衛戍病院に居るよりもどれほど氣持の上でもいいか知れない。

毎日俺は寢て暮らした。本を讀むことだけが仕事であつた。兵營よりも自由に何でも讀めた。甘いものを食つて寢てゐるので、俺は金を蓄めた奴が肥るやうにメキメキ太つた。が膝の關節はまだ悪かつた。すくなくとも軍醫殿だけには未だ悪いらしかつた。俺は悪い悪いで押し通した。呑氣だつたがただ困るのは夜になると高田がひつきりなしに咳をする事だつた。その夜もウツラウツラしかけたところをその咳で眼を覺された。

と何か言ひ合つてゐる樣子だ。

「お願ひします、出して下さい」

「いいから靜かに寢て居れ」

『駄目であります、悪くなるばかりです』
『さう思ふことがいけないんだ』
『昨夜からまた咳がひどくなりました』
『靜かにしとればよくなる』
聲が段段高くなつた。俺は何かで強く腦天を打たれた氣がした。
『いくらお願ひしても駄目でありますか』
『病狀によつて出すものは出す』
『これほどひどくなつてもでありますか』
『お前のはまださう酷くない』
『どうしても駄目でありますか』
俺はチラと毛布の外に投げ出された高田の骨ばかりの手首を見た。

五

が翌日になつて高田は兎も角も除隊になつた。

高田は流石に嬉しさうに血の氣のない頰に笑ひを漂はせて、
『達者になつてまた來るよ』
と言ひながら、出市した母親と連れだつて病院を出て行つた。
が高田が大部弱つてゐることは、高田たちの俥が衞戍病院前のダラダラ坂を下り切つて家かげに折れて了つたときに、其處に出て居た看護婦の一人が『隨分ひどくなつて居ましたから……』と呟いた口ぶりでも知れた。
此處での生活は兵營のそれよりも遙に上等で呑氣だつた。食ひものがいい、麥飯とは違つて粒よりの白米だ。兵營では中々拜めない上等の魚がついて來る。寢臺が上等だ。ベンチの上に寢るやうな、ゴツゴツした奴とは違つて、氣持ちよく跳返るスプリングと來てゐる。毛布が上等だ。その上等の毛布にくるまつて、お望みとあれば一日寢てゐられる。何ヶ月に一度女學生が參觀に來る外には、女の影を見ない兵營と違つて、看護婦たちが始終廊下を泳ぎ廻つてゐる。庭にはやさしいコスモスも咲き殘つてゐる。
×××××××、×××××××××××××××、横田が
ときどきやつて來て本を供給して呉れるので、怠屈するやうなことはなかつた。軍醫が何とか蚊とか

言ふが、××××××××××××××、×××××××、胸膜炎だとか、腫物だとか、肺炎だとかで事實動けない連中も居たが、×××××××××××××××。

寢坊な木下軍醫が出て來るのは大低十時過ぎだつた。荒療治で兵卒が悲鳴を上げると（軍人がそんなことで何うするッ）と喚鳴る軍醫殿は、その實給料だけ働けば澤山だといふ調子だつた。

朝晩の寒さは酷しかつたが、日が上るに連れてポカポカ暖かい小春日和が續いた。

病舎と病舎の間にテニスコートが二つある。朝飯がすむと俺達はノソノソ這ひ出してテニスをやつた。俺達はそのことを『甲羅を干す』と言つた。

『おい、甲羅を干さう』

そしてゾロゾロ出かける。中學で選手だつたのも居れば、鍬の外には握つたことのない厚まくれた手でラケットを振り廻してゐるのもある、もう滅茶苦茶だ。

テニスなんか何うでもいい。思ふ存分『甲羅を干し』さへすればいいのだ。

無論、歩哨を忘れなかつた。

病院のダラダラ坂を一町程下ると人家が込み合つてゐる。その人家の間から軍醫殿の姿があらはれると、

『おーい、突喊だ!!』

と歩哨は呼ぶ。俺達は一セイにそれぞれの寢臺に突喊する。で軍醫殿がヨチヨチ坂を上りきつた頃には、俺達は毛布をかぶつて鼾をかいてゐる。

軍醫殿は病室に這入つて來ると叫ぶ。

『起きろ起きろ、何時迄寢てゐるんだ』

こんな調子で俺はカッキリ二ケ月病院に居た。出る前の日だつたと思ふ。横田がやつて來た。

『まだ悪いのかね』

『この通りピンピンしてゐよ』

と俺は愉快に笑つた。横田は羨望に耐へないやうに眼を輝かせた。

『×××××××××××』

横田はときどき本を供給して呉れて居たが、此處二週間ばかり顔を見せなかつた。俺は何か變つたニュースが無いかと訊いて見た。

『さうだな』

横田は考へる風だつたが不意に顔を上げて笑ひながら言つた。

『人差指をつぶした重が五日ばかり前出て來たよ、相かはらず營倉の中を駈足の練習をしてたんだが……あの頑丈な男が別人のやうに痩せて出て來たよ』

『逃亡の恐れはないのか』

『逃亡の恐れあり注意を要す……か。まだやつて居るよ。ハッハッハッ』

俺達は笑つた。が横田はすぐに眞面目な顏になつて言つた。

『さうだ。……高田が死んださうだ』

——一九二九・一一・一〇——

見えない鑛山

『門衛さん、俺ァ鳥度停車場まで行つて來るして』

若い坑夫の常吉は、その時もさう門衛に聲をかけたのであつた。

鑛山の入口にはただ一つの門しか無かつた。坑夫たちは、鑛山の出入には必ずこの門を通過しなければならないと同時に、門衛に聲をかけなければならないことになつてゐた。

『また町へ活動寫眞でも見に行くんでねぇかな』

門衛は疑はしさうな眼つきをしてゐた。上京するといふので母の縫ひ直して呉れた兄の着古しの飛白を着て、これも兄のお古の鳥打帽を被つてゐる弟の三吉を顧みながら、常吉はそれに答へた。

『いえこれ、三吉が東京さ行くんで送つて行くのだす』

『東京、また何しに東京なんぞへ行くんだ』

『奉公にやるなであす』

『奉公だつて……知らない土地へ行かんでも、坑内にゐたつて幾らも稼げるでねぇか』

蔑むやうな調子で門衛は言つた。

三吉は赤くむくれ上つた眼をしてキョトンとしてゐた。その眼を常吉は、弟にけどられないやうにチラと見た。

何時でも濛々と立ち罩めてゐる煤煙が、その眼をそんなにして仕舞はなかつたら、三吉は製煉場をよさなくてもよかつた。また上京する必要もなかつた。何を好んで知らぬ土地へやるものか。恰度さうして三吉の製煉場をよしたときに、町の親類から、東京の印刷工場で棲込みにして使つて呉れるところがあるといふ話しを聞いたので、その氣になつた迄でのことであつた。

『東京なんぞは辛えぞ、のろまなものが樂につとまると思つたらえらい違えだぞ』

するとと三吉は突然、人が何か重大なことを決心した時にする表情をあらはして言つた。

『俺ァいいよ、出來なかつたら歸つて來る積りだから』

『歸つて來るつて、馬鹿な、それなら始ッから行くことねえでねえか。會社ではお前達の働きいいやうにしてあるんだからな』

門衛は呶鳴つた。

三吉は悄氣込んでしまつた。さういふ弟を見ると同時に、何か門衛に言ひ返してやりたい衝動を感じながらも、柔和な性質の常吉は默つてゐた。

『此頃よその土地へ行く若い者を見ねえ』と門衛はおッかぶせるやうに續けた『碌なものは一人もありやしない、みんな碌でもない頭腦になつて歸つて來るぢやねえかよ。お前の仲間の八重治を見ねえ』

八重治――坑夫の組合を組織しやうとした結果、鑛山を追放された八重治は、その後も隣縣の鑛山から時々歸つて來ては、潛入的に色色な仕事をして行つた。門衛の聲にはその八重治と最も親しい間柄であり、八重治の歸つて來るときには、必ず其處の門まで迎へに出る常吉に對する强い反感の響きがあつた。

（畜生、八重治が何うしたつてんだ！）と常吉は心の中で叫びながら言つた。

『なあに門衛さん大丈夫であすよ、三吉はまだほんの子供のことだし』

『それがさ、東京の工場なぞに二三年も居て見ろよ、碌なことないにきまつてゐる。八重治の仲間になる位ゐが落ちだよ。嘘だと思つたらその時になつて見ろよ』

恰度、山長の家族が、上京中の山長と一緒にやつて來るといふ日のことであつた。役人たちは皆トロッコに乘つて出掛けて行つた。そして常吉だけは、トントンと克明に枕木を踏んで歩いてゐた。坑夫はトロッコを利用出來ないことになつてゐた。

常吉は坑内で弟の歸つて來た報告を受けた。停車場から電話がかかつて來たのであつた。上京して

まだ一月にもならなかつた。知らせを受けると同時に常吉は、叩き出されるやうにして鏑山の門を出たあの時の弟の姿を思ひ浮かべた。常吉は意外も意外だつたが、門衛の言つたことが或る意味で的中したことが癪の種だつた。

トロ路の兩側に並んでゐる長屋の前には、女房たちが姿をあらはして何か囁き合つてゐた。停車場までは三里餘あつた。一里近くも歩いたと思ふ頃、向ふから一つのトロッコが走つて來た。常吉はやや遠くから、その特別仕立のトロに乘つてゐるのは、山長夫婦ともう一人の小さい男の子であるのを認めた。

摺れ交ふときに、常吉はピョコンと頭を下げた。トロはしかし、チラと常吉の方を一瞥したに過ぎない山長を乘せて走り過ぎた。

暫らくして常吉は、斷崖の腹を一本の綱のやうに危ふくたつてゐる路を歩いてゐた。またトロッコの音がして、それには着飾つた山長の娘達が乘つてゐた。その後に役人たちを乘せたトロが二臺三臺と續いた。

常吉は線路の傍に身を避けながら、若しや三吉が乘せて貰つてゐはしないかと、急がしく眼で送り返へた。しかし勿論三吉の姿は見えなかつた。何時もならば、役人たちに一々お辭儀する筈の常吉もムッとした表情を浮べながら突ッ立つてゐた。さういふ常吉を嘲るやうに、トロッコは轟然と唸りながら走り過ぎた。

常吉の顏は汗で硬張つてゐた。停車場近く辿りついたときには、西陽は地に長い影をひいてゐた。可なり遠くから常吉は、停車場の入口の柱に凭れて立つてゐる弟の姿を認めた。

それは鳥打帽も被つてゐなければ、出發のとき着更へや何やら入れてやつた風呂敷包も持つてゐない三吉の姿であつた。

常吉はある不安に肚胸をつかれた。

汗を拭きながら常吉は駈け寄つた。そして叫んだ。

「三吉、歸つて來たかよ」

三吉は心持ち顏を上げた。何とも言はなかつた。それはハキハキ物を言ふ性質の三吉に似合はないのを常吉は感じた。

眼は矢張り赤くむくんでゐた。三吉は何か言ひたげに口を歪めたが、そのまま深く首垂れてしまつた。

その樣子は何か惡いことを仕出來した人間の樣子に似てゐた。常吉は何か言つて弟を慰めやうと思

つた。しかし何も言ふことが出來なかつた。

よく見ると、その眼は一層惡くなつたやうだつた。ただのむくれ様ではなかつた。三吉はその赤く爛れた眼を、すべての光りと明るさを拒むやうに、固く閉ぢてゐた。

『三吉、鳥打帽何處へやつて來たばあ』

『知らねえ』

『風呂敷何處へやつたけな』

『分らねえ、上野停車場だべえ』

可なり永い間に二人はこれだけ言つた。

柱に凭りかかつたまま三吉は身動きもしなかつた。

『さあ、日の暮れねえうちに歸るべえ、お前の歸つたことお母ァ知らねえだからなあ』

と暫らくして常吉は言つた。それでも三吉は動かなかつた。常吉は三吉の蒼ざめた頰が時々ピリピリと痙攣するのを認めた。

『さ遲くなるから氣嫌直して行くべえ』

と言ひかけて、常吉は弟の肩に手をかけながらその顏を覗き込んだ。

『三吉、どうしたけな、お前何處か惡いでねえかな、どうしたけな、惡かつたら惡いと言はねば仕様がねえで』

すると三吉の脣を漏れた次の言葉が、常吉の腦天を打つた。

『俺あ盲目(めくら)になつたのだ』

その言葉は低かつた。常吉の眼尻からは涙が流れ出して、それは弟の肩に置かれた常吉自身の荒れた武骨な手に降りかかつた。

常吉は弟の手をひいて歩き出した。

『お前、その眼痛むでねえかな?』

『少しばかりでねえだよ、千切れるやうに痛むだあ』

それでも三吉は元氣に歩いた。

しかしトロ路が惡くなるに隨つて、三吉の樣子はひどく臆病になつた。上り下りのあるトロ路に這入ると、枕木の間隔もひどく不規則になり、石コロが澤山轉つてゐた。

三吉は枕木や石コロに躓いて何度も倒れた。起上ると前より一層ものに怯えた樣子で歩き出した。

『我慢して歩けえ、歸つたらゆつくり寢るべえからなあ』

常吉は何度も何度もさう言つて勵ました。すると三吉は單に歩くことだけに全神經を集めてゐる樣子で、少しでも歩調を早めやうとあせつた。そしてその爲めに躓いたり爪先を打つたりした。苦痛はその血の色のまるで無い小さな顏一杯にあらはれた。

『ゆつくり歩かう、どうせ夜間になること分つてるからなあ』

常吉はまたさうも言つた。

フト三吉は何か思ひ出したやうに立ちどまつた。

『先刻、役人あど、みんなトロさ乘つて行つたやうだつけなあ』

『うむ』

まだ一里も來てゐなかつた。三吉の乘つてゐた列車には山長の一行も乘つてゐた筈であつた。自分たちはこの先かうして二里餘も歩かなければならないのに、三吉に一瞥も呉れなかつたに相違ないその一行は、既う目的地に着いてしまつてゐるに違ひなかつた。常吉は、先刻役人達のトロッコに、若しや三吉が乘せて貰つて居はしまいかと思つたことを思ひ浮かべた。チェッ、あんな奴等に、そんな期待を持つことが抑抑間違ひだつたのだ——と常吉は心の中で叫んだ。

『三吉、お前眼が潰れたんでやめさせられたのだべぇ』

常吉は恐ろしいものに觸れでもするやうにさう訊いた。

『うんにや……』と三吉は潰れた赤い眼をあけて言つた。『やめさせられたときはまだ見えてゐたどもなあ、それから直ぐに潰れたなだあ……』

歩くだけの事で一杯になつてゐる三吉は、時々思ひ出したやうに話した。話すときには兄の腕をグッと後ろに引ッ張つて立ち停つた。常吉はさういふ弟の新しい癖を悲しげな眼で眺めやつた。

——門衛の言ふのろまな三吉は、傭主を滿足させなかつた。三吉は事ごとに叱り飛ばされこづき廻はされた。のみならず眼は惡くなる一方であつた。三吉は全く用が足りなくなつてしまつた。工場の主人は、三吉の全然失明する間際になつて、豫告もなく手當もなく、電車切符一枚呉れただけで、三吉をポンと往來に突き出してしまつた。上野驛の待合室のベンチの上に一日寢てゐる間に、三吉の眼は坑内のやうに暗くなつてしまつた。そこへ或る人が三吉の行先を訊ね、風呂敷包みを探して呉れた——ベンチの上で烈しい眼の疼痛のために藻掻いてゐる間に、風呂敷包は何處かへ紛失してしまつてゐた。その人はやがて三吉に切符を買つて呉れ、その上に汽車にも乘せて呉れた。その人も同じ列車に乘つた。そして米澤邊で、車掌に三吉を托した上で降りて行つた。三吉の話しから推量すると、その親切な人は休暇で鄕里へ歸る横須賀あたりの水兵らしかつた。

暫らくして三吉は俯向けてゐた顔をあげた。
『兄ちや、お日様照つてゐべかなあ』
『うむ、今目倉山のかげさかくれるところだ。杉の木さかかつたゐるぜえ』
常吉はさう説明しながら、目倉山と言つた自分の言葉にハッとして、チラと弟の顔を顧みた。
だが三吉はまた言つた。
『兄ちや、東京は明るいとこだでえ』
三吉の頬には無邪氣な微笑みさへ浮んでゐた。煤煙のために殆ど太陽を見ることのない鑛山の外知らなかつた三吉にとつて、それは實感だつた。だが三吉の眼は潰れてしまつてゐた。
常吉は心の底から叫んだ。
『俺ァ惡ゐかつたなあ、三吉、東京へなんぞ行かなければよかつたになあ』
三吉は答へなかつた。
永い間二人は無言のまま歩き續けた。
――常吉にしても好んで三吉を上京させた譯ではなかつた。すべての坑夫は多かれ少なかれ眼が惡いと言つてよかつたが、就中煤煙のムッと鼻を突く、臭氣で息の詰りさうな熔鋼爐のそばに、日がな

一日働いてゐたのでは、三吉の眼は鰯の眼玉同樣に腐る一方であつた。そればかりではない。建物の材木さへもボロボロに腐つてゐる程の製練場では、まして人間の生身の堪まらう筈がない。大抵の人間が五年位ゐでまゐつて仕舞ふのを知つてゐる常吉は、僅か一年足らずですつかり血色を奪はれてしまつた三吉を、思ひ切つてよさせた。其處へ恰度、町の親類から、東京の工場で棲込みの小僧につかつて呉れるといふ話しを聞いたので、身體の張い三吉の爲めには、まだしもその方がいくらか生存に適してゐるやうな氣もして、早速話しを決めて貰つたのであつた。それには先づ眼の療治をする必要があつたが、萬事は役人の家族本位になつてゐるやまの病院ではそれも望みなかつた。病院では患者の診療は、役人の家族が優先權をもつてゐて、この習慣に馴らされた坑夫の家族は、どんなに早く行つたときでも、何時間でも神妙に待つてゐた。最初三吉の一人行つたときは、例に依つて最後まで待たされた三吉は――これ位ゐの眼は坑夫の間では普通だ、それを一々治療してゐる暇も設備もない――といふ、理由にならない口實で、そのまゝ突ッ返されて來た。そこで常吉が出掛けて行つてやつと目藥だけは貰つて來た。その目藥は、その目藥といふ言葉が約束するだけの効き目はあつたが、それ以上三吉の眼をよくする爲めに町の醫者に通はせることは、常吉一家の生計のみならず、通ふことの不便と困難からも見込みがなかつた。――『やまに居たからつてよくなる譯ではないしなあ、こんたら

煙くせえとこに居るよりも、東京さ行つた方が却つていいかも知れねえんでなあ」と母の言ふことにも、常吉は道理があるやうな氣がした。——そのとき常吉は、三吉が暇を告げて家を出るときに、病院から貰つた藥の殘つてゐる瓶を、あはてて風呂敷包みに入れた母の姿を思ひ出した。

『兄ちや、やまの煙出し見えるかあ』

黑松の生えた低い山裾をつたつて、その向ふ側に出ると同時に、遙か遠くに鑛山の大煙突から吐き出される煙が空を濁してゐるのが見えた。やまから町への往き還りの習慣でそれを呑み込んでゐる三吉は、其處まで來るとさう言つた。

常吉は弟の盲目になつたことを、强く意識しない譯には行かなかつた。

『うむ、見えるよ』

日は間もなく目倉山のかげに落ちて行つた。

薄暗さが漂ひはじめた。

少しづつ常吉は步調を早めた。三吉は一生懸命に步いてゐた。

トロ路に馴れるに從つて、三吉は大膽になつたが、疲れて來ると一層度々、枕木に爪先を打つたり躓いたり倒れたりする樣になつた。三吉の苦しさうな顏の上で、一生懸命さは必死に變つてゐた。

夕闇は色濃くなつた。

燈火がチロチロと遠く浮んだ。

常吉は烈しい疲れと苛立たしさを感じた。殆ど這ふやうにしか步けなくなつた三吉は、一度轉ぶと中々起き上らうとしなかつた。どうしやうもない苛立たしさを抑へつけながら、常吉は默々と弟の手をひいて步いた。

恰度——先刻常吉が着飾つた山長の娘達のトロに出遇つた斷崖のトロ路に這入らうとするときだつた。

急に常吉の手を荒々しく振り離して、三吉はベタリと枕木の上に座つてしまつた。

『俺ァ、あと行かねえ、ここにかうして寢てゐるだあ』

三吉は泣くやうな聲で叫んだ。工場から投げ出されて以來の烈しい疲勞が、三吉をもう一步も步けなくしてゐるのだ。

面喰つた常吉は暫らく呆然として突ッ立つてゐた。

『そんなこと言はねえで、我慢して步けえ、歸つたら樂になるべえからなあ』

常吉は哀願するやうに言つた。だが三吉は動かうとしなかつた。

「そだらなあ、時々休み休み行くべえから、元氣を出して少しづつ行くべえ」
「俺あ此處に寢てる方いい、かまはねえで兄ちや歸つて呉れせえ」
その聲は泣きぢやくるやうに響いた。
「寢てるて何うするつて、なんともならないんて、休み休み行くべえよ」
常吉は苛々しながら三吉の手を握つた。その手を三吉は一層荒々しく振りほどいた。
あたりはすつかり暗闇だつた。
烈しい瀬の音が、斷崖の下から響いて來た。
三吉の何處か剛情なところのある性質を知つてゐる常吉は、流石にムッとしながら、凝然と闇をみつめたままイんでゐた。
すると闇の底から、瀬の音とはまた別なものが響いて來た。それは三吉の泣聲であつた。
常吉は自分の身近くの闇のなかに、あはれな不具者として置かれてゐる弟を感じた。同時に常吉の腦裏に、一種の恐怖とともに浮び上つて來たのは、三吉の盲目になつたことに依つて一層慘めなものとなつた自分達の一家と兄弟關係だつた。常吉の八重治のやうに反抗的になれない理由は、鑛石の破片で腦天をやられて白痴になつた兄と、年老ひた母を、養つて行かなければならない事に根差してゐ

た。三吉の盲目になつた今は、兄弟中で滿足なのは自分一人に過ぎないのを、常吉は今更のやうに感じた。常吉の身内には烈しい憤激が湧き起つた。
「そだらなあ三吉、脊負(おぶ)つて行くからなあ、そろそろ出かけるべえ」
常吉はやさしい聲で言つて、弟の方へ手を差しのべた。
泣聲は止んだ。用心しながら這ふやうにして斷崖のトロ路を向へ渡り切ると、常吉は弟の木綿帶を解き、それでしつかり脊負つて歩き出した。
からだのほとぼりが感じられた。昨日からの疲勞が一時に出たらしい三吉は、常吉の脊中で他愛なくぐつたりしてゐた。常吉は兄が弟に對して感じる愛情を覺えた。
石コロや枕木で傷いた爪先や踵が、ヅキヅキと傷んだ。三吉は重かつた。度々トロ路の外へよろけ出しさうになつたり倒れさうになつたりした。
だが常吉はしつかりと足を踏ン張つて、何ものかを押し戻すやうに、滅茶苦茶に進んで行つた。何か新しい力がからだの底から湧き起るのを感ずると同時に、常吉は心の中で――畜生、今に何うするか見てゐやがれ――と叫んでゐた。

弟を脊負つた常吉が、鑛山の門に辿りついた時には、もうすつかり夜になつてゐた。

『停車場さ行つて、今歸つて來たであす。濟みませんが開けてたもれせ』

常吉は柵に顔を寄せてなかを覗き込みながら、疲れ切つた聲で叫んだ。

日記をつけてゐるらしい門衛は、硝子戸越しにチラと此方を見てから、面白くない顏をして出て來た。

常吉の脊中では、まるで正體なくなつた三吉が、深い寢息さへたててゐた。

――土地者だけで優に全體の生產を支えて行けるこの鑛山では、舊幕時代からの封建的奴隷勞働に甘んじてゐる土地者の方が、徹底的な搾取に好都合であるといふ理由から、渡り者は絕對に使用しないことになつてゐた。それにも拘はらず內部から自覺的な若い坑夫が頭を擡げて來ると、會社はすぐに追放してしまつた。東北地方の一山脈に深く位置してゐる鑛山の坑夫は、自然に外部社會との交涉を遮斷されてゐたが、會社は更に嚴重な門衛を置くことによつて內部から逃れ出やうとする者と、外部から入り込まうとする者を、警戒することを怠らなかつた。追放された八重治が歸つて來ると、すぐにチョコマカ事務所に飛んで報告に行くのは門衛であつた。わざとのやうに、何時までかかつて門を開けにかかつてゐる門衛に、常吉ははつきりと、全坑夫を人間以下の生活に縛いでゐる資本家の忠實な而もヨボヨボの番犬を感じた。

『何處か惡いかね』

門があくと同時に、常吉の脊に死んだやうに眠つてゐる三吉を見て門衛は言つた。

ただ一ト言常吉は答へた。

『盲目になつたであすよ』

門衛はあきれたやうな顏をして二人を見くらべてゐた。

『だから言はむ事ぢやねえ、人の言ふことを眞に受けねえから、そんな破目になるんだよ』

そして門衛は、自分も被搾取階級に屬しながら、搾取階級の心理で自己を瞞着することに、その特殊な職業に依つて馴れつこになつた人間に特有な、あはれむべき表情を浮かべながら續けた。

『第一、やまを出て行くちうことが間違ひのもとだよ。やまを出た人間を見ねえ。八重治のやうに會社に碌でもない苦情を持ち込む人間か、でなかつたら飛んでもない片輪者になつて來るぢやねえか。高い汽車賃をかけて東京まで盲目になりに行くなんて氣のきかない話しぢやねえかよ』

常吉は首垂れて聞いてゐた。その常吉の腦裏には、二年目に長野の紡績工場から歸つて來たときに膝關節のリウマチスで跛をひいてゐた八重治の姉や、違つた土地から生れもつかない片輪になつて歸

つて來たある若い坑夫の姿が、憤りとともに往來してゐた。

赤子を搖りあげる母親のやうに、常吉は脊中の弟を搖り上げて門衛を見た。硝子戸から漏れる燈火は、額から流れ落ちる夥しい汗の雫と、いつもは寧ろ女のやうに優しい常吉の顏に、突然烈しい憤怒の炎の燃えあがるのを見せた。

常吉は荒々しく叫んだ。

『何處も同じでねえか、東京だつてやまだつてよ。何言つてるでえ、やまに居たらもつと早く盲目になつたに違ひねえだあ』

——一九二八・四——

一

山腹の煙突から吐き出される煤煙が、霧にでもなりさうな寒々とした曇空を、いやが上にも暗く濁してゐた。

煙臭い町は朝の烏渡の間だけ賑つた。長屋といふ長屋から、タガネを下げた男や赤子を背負つた女房が坑内や撰揚場に向つた。鑛夫たちは仲間に出會はすと烏渡顔を上げた切りで、鑛夫特有のしつかりした足どりで默つて通り過ぎた。いつもの元氣な挨拶の聲は聞かれなかつた。疲れた青い顔をした鑛夫たちが坑口から上つて來た。その陰氣な疲れてボンヤリした顔の長い列はノロノロと町に這入つて來た。朝らしい輝きは何處にも見られなかつた。

朝の交代の後、町には溝の流れに浮いた飢えた家鴨の寒々とした聲だけが殘つた。寒い風の中に土釜色の皮膚をさらけ出した山と山との間に、ボロ屑のやうに撒きちらされた町はひつそりとなつた。半時もすると今度は子供たちが蟻のやうにあらはれた。子供たちは町を貫き流れてゐる川に沿ふて下り、町端れの橋を渡り、町からはやや高く、禿山の裾に、黑い汚點のやうに小さく見える學校に向ひ糸屑のやうに見える急勾配の坂を上つて行つた。

流し元で何かコソコソいふ音がした。

『八十治、何してゐるなが』

押入をあけて冬仕度のボロを探してゐた母親のお幹は神經質に叫んだ。

流し元はひつそりとなつた。朝と晝はこの頃薩摩芋で間に合はせてゐた。朝一家六人でそれを食ふと晝間の分は幾らも殘らなかつた。お幹は尋常一年のお米とまだ學校に上らない百治とが喜んで食ふ樣子を見ると自分の空腹を我慢する日もあつた。それがこの頃になつて戸棚に殘して置く芋がいつも不足して居た。お幹は八十治の辨當がはりにタツブリ芋を包んでやつてゐた。が八十治は何時の間にか芋を盜んで行つた。その上學校から歸ると猫のやうに鹽引の切目を掠めて行つた。お幹はさういふ八十治を理解出來なかつた。手に負へない慾張りとしか思へなかつた。

また流し元へやつて來た音がした。

『何時まで學校さ行かねで何してる』

『何もして居ねえ』

さう言ふ聲でまぎらはしてソツと戸棚を明けるらしかつた。お幹はカツと腹が立つた。

『畜生、まだ愚圖愚圖してゐるがッ、乞食犬、餓鬼ッ』

叫びながらお幹は亂暴に障子を明けて追ひかけた。

八十治は三つ四つの芋を手掴みにした儘、二三町の間、夢中になつて走つた。

やがて走るのをやめてゆつくり歩きながら芋を食ひはじめた。芋は『坊つちやん』たちに奪られるに決つて居たから八十治は學校の途中、出來るだけ食つて了ふことにしてゐた。そのうち八十治は急に悲しくなつて來た。母親に怒られることには馴れて居た。が今日のやうに腹からの怒りと憎しみを籠めた聲は初めてだつた。八十治は家を追ひ出されたやうな悲しみで一杯になつた。

不安な眼をキヨロ〳〵させながら八十治は『坊ッちやん』たちの眼から逃げて歩いて居た。やつと鐘が鳴つた。子供たちの群は幾筋もの縞をつくりはじめた。整列しないうちに列に加つたが最後ひどい目に遇ふ。そこですつかり整列してから八十治は列に這入つた。

坊つちやんが居た。そのすぐ前に八十治はソツと飛び込んだ。まだ『氣をつけ』の號令まで鳥渡間があつた。がもう八十治の脊中は恐ろしさの豫感で丸く縮み上つて居た。

『ゲホ（お凸の事）芋持つて來たか』

八十治は返事のかはりに、垢で眞ッ黑な頸を龜の子のやうに縮めた。返事の如何に拘はらず、蹴る

か、殴るか、捻ぢ上げるかに決つて居たから返事はいつも後廻しにして居た。

『持つて來たべせ、ゲホ、うむ』

が坊ッちやんの清次はさう繰返してギュッと八十治の右腕を捻ぢ上げた。肩が割れさうに痛い。八十治は體を曲げ、眼を閉ぢ、凝と苦痛をこらえた。反抗すればイヤが上に痛い目に遇ふ。で凝と辛棒した。あたりの子供たちの眼は一樣にさういふ八十治の顏に注がれた。がどの眼も同情や反感のかはりに、ただボンヤリした鈍い光りを放つて居た。清治の顏には勝ち誇つた色が浮んだ。

『氣をつけ』の號令が苦痛から八十治を救つて呉れるまで八十治は我慢した。

一時間目の休み時間を、八十治は猫に追はれる鼠のやうに他の教室にかくれたり、寒い校庭に逃げ出したり、やつと『坊ッちやん』たちの手から逃れた。二時間目に八十治はたうとうつかまつた。

清次は八十治の襟を捕えてグングン教室に引ッ立てて行つて叫んだ。

『出せ、早く芋出せ』

清次の手下の良太郎がグイグイ八十治の汚れた頸筋を押しつけながら促した。八十治はあきらめて紙に包んだ芋を出した。

『なんだ、タッタ二つか』

開いて見て清次は不服を言つた。

『取られると思つて食つてしまつたべ、狡い奴だな、ゲホ、明日持つて來ねばこれだ』

そしてゴッンと一つ喰はせた。

晝の鐘が鳴ると子供たちは芋を食ひはじめた。子供たちは春頃から弗々辨當がわりに芋を持つて來るやうになつた。今年になつてから鯖夫たちの賃銀は三度も下げられた。事實上鯖山主から俸給を貰つて居る校長はこの極度の窮乏を緩和する義務があつた。『芋をもつて來ることはちつとも恥しい事ではない』といふ校長の訓話で子供たちは誰も彼もさうした。子供たちは始め喜んだ。ボロボロの南京米より遙かにうまかつた。段々にそれがゴッゴッ咽喉につかへるやうになつた。以前の辨當が戀しくなつたがもう母親たちはさうして呉れなかつた。子供たちは飢えてゐたから口の周圍に黄色い粉をくッつけながら一心にむさぼり食つた。

八十治はいつも晝間食ふ芋が無かつた。八十治は皆の食ふ樣子をうらやましく思ひながら、階下の雨天體操場に降りて行つた。其處には辨當を持つて來ない子供たちが多勢集つてゐた。

皆は空腹の不平のやり場に困つた顏をして散り散りになつて居た。ガランとした運動場は寒かつた直き子供たちは床板にチョークで書いた土俵に寄つて來た。空腹と寒さをまぎらはす手段は一つしか

無かつた。

車座になつた子供たちは一人づつ土俵の眞ン中に飛び出した。二人からだをぶッつけ合つた。勝つた子供が土俵の中に殘つた。負けた子供は車座に戻り、次の子供が飛び出した。六年生の土俵の中はで音松が一番强かつた。

『ホラ、來た來た』

叫びながら音松は次から次と負かした。音松は空腹を忘れることが出來た。が負けた子供は座に戻ると同時に、運動した反動で寒さと空腹に堪えられなかつた。すべての慈愛から見はなされたやうな表情が皆の顏に浮んでゐた。八十治もその一人だつた。

鐘が鳴つた。辨當をつかつた子供たちが騷々しくなだれ込んで來た。車座の周圍には垣が出來た。垣の中から清次が呼んだ。

『ゲホ、負けてばかりて居て駄目だ、こつちや來い』

八十治は襟を掴んで後へ引ッくり返された。役人の子は、鑛夫の子と遊ばなかつた。『坊ッちやん』たちは、その相手が鑛夫の子供たちの多勢の團體的な遊びの中に居るときには手を出さなかつた。清次がこの習慣を破つたことが八十治を氣强くした。八十治は起き上りざま相手の膝を蹴つた。

蹴られた清次は神經質な怒りで相手の横面をはつた。車座になつた皆の顏は自分だちの大將である音松に向けられた。

『何してそんなひどい事をするッ』

音松は叫んだ。がその樣子には、役人に對する鑛夫たちの無智な畏怖と同じ種類の相手を恐れて居るところがあつた。力では清次は音松の敵では無かつた。が他の坊ッちやんたちが清次に加勢した。それに反してかうした種類の喧嘩に馴れて居ない鑛夫の子供たちは怯えた眼でボンヤリ見て居た。それでも音松は負けては居なかつた。がその顏には坊ッちやんたちに喧嘩を賣つたことに對する理由のない後悔と恐れが表はれて居た。音松の努力は相手を挫く努力から自分がベシャンコにならない努力に變つて居た。清次は其處につけ込んで相手の鼻をイヤといふ程下から突き上げた。

サッと音松の上脣が血で染つた。

二

『さあ、みんな、こつちさ來て並べ』

お峰はキンキン響く聲で叫んだ。働く上で男も女もないこの町では特に女の言葉といふものが無か

つた。ただその甲高い聲音だけがお峰を男の子から區別してゐた。

横に二列に新聞紙を敷き並べた上に女の子たちは並んで座つた。虱の居ない『坊ッちやん』と『蠟ちやん』たちが學校道具を肩にさげたまゝ物好きさうな眼を動かしてゐた。

その一人がお峰に叫んだ。

『級長だとて生意氣たけて、せば、お前は虱居ねえてか、なんぼでも居るべせ、見てやるが』

『あい、うたて、知らねえ』

お峰は男の子の手から素早くスリ抜けた。

教師の初江が這入つて來た。見物の子供たちは廊下へ逃げた。そして硝子戸を開け、首をつき出し騒々しく冗談口をきいた。

初江は先づ虱の居る子供に手を上げさした。殆ど全部の手が上つた。四人殘つた。初江は近づいて一人一人の髪を分けて調べて廻つた。昨日あたり、洗つたらしく綺麗な毛の子供も居た。が虱の居ないのは二人だけだつた。二人だけ列から退けて全部髪を解かせた。お峰が髪を解くのを手傳つて廻つた大部分は汚いボソボソした毛だつた。指を突ッ込んで鳥渡毛筋を分けて見ると、太つた虱が鈍い足であはてて毛のなかにかくれ込んだ。

それは初江の提案でこの春からやり出した事だつた。が初江は鑛夫の生活條件がよくならない限り虱は絶えないといふことを五十治に聞かされてからイヤになつて了つてゐた。校長はこのことを喜んでゐた。初江はいつも不愉快な自縄自縛を感じて居た。

お峰は自分の仕事が濟むと列の端れに行つてチョコンと据つた。初江はお峰の頭から順々に黄色い粉をかけ兩手でゴシゴシもみ込んで廻つた。

その上で初江は教壇のテーブルに行つて、風呂敷包から五十治から借りて來た『勞働組合の歴史』といふパンフレットを取出して讀み始めた。黄色い粉が虱を殺すまで五十分の間があつた。

十八世紀の後半から十九世紀の前半にかけて、産業革命は小規模の家内工業を大規模の工場組織の機械工業に變化させた。其處から賃銀勞働者が生じた。資本家と勞働者の利害は明瞭となり、勞働力を賣ること以外一切の生産手段を失つた勞働者に殘されたものは自分達の團結力と組織の力で生活條件を改革して行く一つの道だけとなつた。——讀んでゐるうち初江は文字の意味だけはどうやら分つた。が初江の腦裡には五十治たちの事が浮んだ。五十治の長屋に集つて鑛山の苦情を言つてゐる坑夫たちのことが浮んだ。五十治たちがどうして生活條件を改革して行くのか。初江はその疑問をパンフレットが解決して呉れることを願ひながらドンドン讀み進んだ、が何時かしら文字だけが眼先にチラ

チラして意味が何處かへ行つて了つて居ることに氣がついた。

初江の頭には昨日の職員會議のことが往來し始めた。校長はこの頃兒童の間に、ハイカラといふ弊風が生じたと言つた。お負けにそれが初江の責任でもあるかのやうに、初江の方ばかり見て言つた。初江は驚いて何ういふ意味かと訊いた。校長は子供が洋服なぞ着るやうになつたのがそれだと言つた初江は夏から秋にかけ、綺麗な洋服を着て來る『嬢さん』以外にもズダ袋のやうな手製の所謂洋服を着て來た子供のあつたことを思ひ出した。校長は更に子供たちが毛を切るやうになつたのは弊風だと言つた。そしてこれは初江が獨斷で奬勵した結果だといふ意味をほのめかした。

初江がこの春奉職して以來、一年と二年の子供の間におかつぱの子が二人三人とあらはれた。それが忽ち流行して夏までには一二年の子供の殆ど全部がさうなつた。初江はこの變化に驚いた。初江はこの現象が自分が虱とりを初めた事と關係のあることに氣付いた。がそれは初江がそれをすすめる口吻を洩らした結果ではなかつた。それは坑内やトロ押しや撰鑛場で働いて居て、子供の頭を洗つてやつたり、虱をとつてやつたりする暇のない母親たちの餘儀ない必然が生んだものに違ひなかつた。

初江は秋になつて突然一二年の受持ちから五、六年の受持ちに變へられた理由にそのとき氣がついた。同時に初江は校長の態度から自分が五十治たちと往復してゐることに對する反感を感ぜずには居られなかつた。初江は今あの眼鏡のかげに卑屈にチラチラして居る校長の眼を思ひ出してたまらない輕蔑を感じた。

『峰さん、さあ、はじめて』

初江は教壇を降りて促した。初江とお峰の二人は床に敷き並べた新聞紙に俯向けた頭の毛を兩手でゴシゴシ揉み出した。汚れた毛の臭氣が鼻を突いた。ハチ切れさうな虱が、バラバラと雨粒のやうな音を立てて新聞紙に落ちた。

老人のやうにカサカサした、脂氣のない、血色の悪い子供たちの皮膚には襯衣の裏のやうに垢が浮いて居た。その皮膚に無數に食ッついてゐる虱を雑布のやうな着物を通して初江は想像した。子供たちは虱取りが終ると二人づつ組みになつてお互ひの髪を結ひ合つた。

初江は校舎の裏の狹い空地に出て行つた。手にさげて來た虱の這入つた新聞に燐寸をすつて燃やした。赤い焔をあげて新聞紙が燃え立つと一緒に、たまらない臭氣が立つた。初江は思はず飛び退いてボンヤリ下の方に眼をやつた。

其處からは鑛山の全景が見降ろされた。左手と正面との山にはそれぞれ二つ宛の採掘場があつた。

學校の同じ山續きには平地から段々に山腹に這ひ上つた製鑛場があつた。この三方の山の底に薄汚い長屋の群を連ねた町があつた。町は右手の山の奥かち流れて來る川に沿ふて一方だけ地形のややひらけて居る西の方に延びてゐた。長屋の列が盡きるあたりに、鑛山の關門を爲す門衛の居る小屋が白い豆粒のやうに見えた。製錬所は正面の山の麓に、造作が煤煙の爲めにボロボロに腐つた眞ッ黑な姿を見せてゐた。セメントの巨大な土管が熔鑛爐から出發してうねりを打つて山の腹に這ひ上り中腹まで行くと突然、恐ろしく太いその瓣眞中からヘシ折つたやうに不格好な短い煙突となつて、その尖端から濛濛と黑煙を吐き出して居た。山は屏風のやうに黑煙を外界に洩れ出さない役目をつとめてゐた。外界に流れ出たがつて、煙は一旦、山ふところに低迷して居たが、やがてあきらめて町の上に逆流して來た。鑛夫たちはシキからォカに上つても太陽を見ることが無かつた。鑛夫のすべては眼と呼吸器を害してゐた。風の吹き廻しで、四方にきり立つて居る山の中に閉ぢこめられた煤煙が猛然と襲つて來て、ムンムンいふ惡臭の中に男も女もゴホンゴホン咳き込んだ。この不恰好な煙突で鑛夫たちに眼と呼吸器の病氣を押しつけることに依つて會社は煙害賠償を免れてゐた。

山は永い歴史をもつて居た。舊藩主S侯の手から日露戰爭後まで地方の資本家の手に經營され、その後××財閥の所有となつた。鑛夫の父親も祖父も鑛夫であつた。その祖父たちの封建時代の奴隷としての傳統を地理的な外部社會との杜絶が立派に保存して居た。三方を險岨な山に圍まれ、僅かに展けた一方に向つて歩行も困難なトロ路づたひに四里先のN町から、燐寸箱の樣なボッボに一時間も乘らなければ鐵道本線に達しない不便は、この町と他の社會との交渉を自然に遮斷して居た。××財閥はこの地理的な他の社會との隔絶と、封建時代の奴隷的傳統を利用することを忘れなかつた。鑛山(ヤマ)の入口には門衛を置いて鑛夫の出入を嚴重に監視した。で鑛夫たちは賃銀が他の鑛山の半分を出でないに拘はらず不平を言ふことを知らなかつた。縣廳の役人と視察者は倶樂部で御馳走をして追ひ歸し、修學旅行團は嘘で丸め、あやしいと見れば門衛は外部の人間を入れなかつた。好況のために鑛夫の增員を必要とする場合には、附近の農夫を狩り集めてそれに充て、よりよい條件で勞働して來た渡り鑛夫は絶對に使用しなかつた。鑛夫の奴隷的な屈從と無智はかくして完全に保存された。鑛夫たちは日常の會話に上下のことを上磐下磐と言ひ、東西南北、左右はカミシモの二句で間に合はせた。大部分の鑛夫は東西南北の觀念をわきまへなかつた。

初江は眼の下に横つて居る煤煙に黑々と汚れた長屋の連りの底から、やがて生々とした力の湧き上つて來ることを想像出來ない氣がした。初江は五年前、この町から出た後にも先にもただ一人の女學生としてA市の高等女學校に入學した。二年目の夏に歸省した初江は、それまでN町から發行されて

居る文藝雜誌などを讀んでゐた五十治が、レニンとか山川均とかの飜譯や著書を讀んでゐるのに氣がついた。一方五十治が文藝雜誌を讀んでゐる頃既にさういふものを知つて居た岩藏はKやTの鑛山運動をして居る小山隆一を、門衛や事務所の役人をいい加減な口實で胡魔化して、しきりに坑内を案内して歩いてゐた。初江は三年目の春、寄宿舍で岩藏が小山隆一を一週間自分の長屋に置いたといふ理由で馘首され山を追放されたといふ五十治からの消息を受けた。その年の冬、五十治や岩藏の手に依つて、若い鑛夫たちを主とした鑛夫組合が出來、追放された岩藏がN町に根據を置いて、外部内部の兩方から組合の擴大を圖つて居ることを知つた。

五十治の變化を、すべての事を微笑で受け入れて居るやうな善良でおとなしいその性質と引き較べて、初め初江は不似合なことに思つて居た。が五十治の熱心さは變らなかつた。五十治は暇さへあれば鑛夫たちを捕えて、組合の性質を說き加入をすすめて居た。五十治の周圍には若い鑛夫が多勢集つて居た。が初江はその集合が單なる寄合としか思へなかつたし、何時になつたらその組合に依つて新しい生活條件が獲らされるのか理解出來なかつた。それはズットと遠い將來のやうにしか思へなかつた。今年になつて三度の賃銀値下げがあつた都度、問題化しやうとする二三人の血氣な鑛夫たちを五十治はただ笑つて濟せてゐた。

風の加減で眼の先がボーと曇つてムッといふ煤煙の臭が襲つて來た。初江はその煙りの底に沈んだ陰慘な町に光りの射す日を考えることが出來ないやうな氣がした。

初江は雨天體操場を突ッ切つて職員室に這入つて行つた。窓際まで行つて初江はハッとして立ち止つた。初江は周圍を見廻した。が何處にも自分の机が見えなかつた。

初江は其處に一人殘つて居る校長を見た。校長は初江の視線を感じながら俯向いて凝としてゐた。その顏には初江にかくして居るものが露骨に感じられた。校長が自分の机を片づけたのだ。初江は烈しい屈辱を感じて思はず顏を赤くした。

初江は昨日の職員會の有樣をまた思ひ出した。

『中村さん』

突然校長が呼んだ。初江は怒りをかくし切れない顏を振り向けた。

『晝間あなたの受持の子供が喧嘩したでせう。ああいふ事は注意して貰ひたいですな。これまであんなことは無かつたですから』

鼻血を流した晉松を世話しながら事の起つた理由を初江は聞いて知つて居た。初江は强く言ひ返した。

『坊ッちやんたちが他の子供をいぢめるからでせう』

言つて了つてから初江は、もうこの學校に居るのも永くはないと思つた。初江は職員室を出て隣りの會議室から順々に見て廻つた。宿直室に自分の机があつた。それはいやがらせて自分から退職させる爲にした事に違ひなかつた。

初江は學校の前の急勾配の坂を下りて行つた。職員會の樣子、校長の眼、他の職員たちの明らかに自分を避けてゐる態度、清次と音松の喧嘩、それ等のものが初江の腦裡を往來した。初江は其處に二つのものの爭ひが物語られて居ることを感じた。と初江の胸には、先刻町を見降ろしながら、容易に何事も起らないだらうと考えたこととは全く別な考えが浮んで來た。もう此處にも爭鬪の芽がふき出して居た。

三

その日の夕方、若い鑛夫たちは初江の長屋に集まつてゐた。非番の鑛夫たちは昏夜のやうに五十治か初江かどつちかの長屋に集る習慣だつた。みんなはA市の女學校を出て來た初江の、自分等に耳新らしい言葉やその言葉で話される知識に耳傾けることを好んでゐた。

この頃各採掘坑の見張部屋に現はれた小頭について皆は話し合つてゐた。これまで坑内は見張部屋の役人だけで面倒な問題が起らなかつた。それがこの頃になつて各見張部屋に三人四人と得體の知れない小頭なるものが現はれた。彼等はハッパ小屋（坑内のダイナマイト貯藏庫）で油を賣つたり、若い女鑛夫にからかつたりする外、實際上の仕事は何もして居なかつた。

『それだよ。皆きいてけれ、今日芳三郎から岩藏の手紙が屆いて居たんだよ』

五十治はボリボリ太い指先で南京豆の皮を潰しながら、人なつッこい眼で皆を見廻した。山とN町の間の車夫（トロ押し）の芳三郎は五十治と組合本部の岩藏との間の傳令をして居た。

『あの小頭といふ奴はな、ッィこの間まで××炭坑に居たならず者の棒頭どもなんだ。言葉つきなんかでもここいらのものでないことは分るべせ。こいつ等は最初傭夫とか何とかの名目で炭坑の組合の切崩しにやとはれて居たども、あの組合は中々そんなことでは駄目だつたべせ。其處でせ、奴等は唯無暗に亂暴を働いたり飲んだくれてばかり居たもんだから、炭坑でも警察でも困つてしまつて仕舞に追ひ出すことになつたなや、其處へ眼をつけて此處へ引ッ張つて來たの誰だと思ふ。あのA市の山師の栗山だや。此處は外と違つて役人ばかりで間に合はせて居たべせ。恰度うッてつけだつたなや、A市の××時事の木下つて新聞記者から岩藏さ知らせて來たッて話しだ』

五十治は氣持ちよく響き渡る聲で笑つてからお上（鑛山主のこと）が小頭を雇ふに至つた理由について話した。お上は五十治たちの組合が今のところ微力であることと表面上何の問題も起さないことで齒牙にかけなかつた。が一方お上は鑛夫や女房たちの全般に、安過ぎる賃銀と購買部に對する實際上の非難の聲の起つてゐるのを知つた。この非難と憤懣は當然組合を擴大し勢力を强め、その性質を鬪爭化するものであつた。そこで當然何等かの問題が遲かれ早かれ表面にあらはれるものとして豫め暴力を用意したのだ。この暴力團はまた、どんな種類の口實でも捕えて組合を叩き潰すことを待ち望んでゐるに相違ないから、愈よ鬪爭を開始する以前に當つて、つまらない口實を與へるやうな區々たる問題の惹起を警戒しなければならない。

五十治は話を初江の事に移した。

『自分の方から退職するやうに仕向けて居るなだ。このことでもお上が俺達に注意して來たこと分るべせ。今までは馬鹿にして居たども』

皆の眼には微かな輝きがあらはれた。

『先生とこやめさせるて』

『お上の御用をつとめてる學校だからせ』

今年檢査を終へたばかりの喜七が言つた。

『先生とこやめさせるやうだつたら、餓鬼ども學校さやらねえやうにしたらいいべせ』

皆は昂奮した。校長に對する感情的な非難を一時的に滿足させる言葉が賑やかに交はされた。初江は皆の話の調子から自分に對する好意と信頼を感じながら言つた。

『そんな事としても何にもならないすべ』

頰がこけ、眼の鋭い、がつしりした體つきの芳松が息せきながら這入つて來た。

『お前方、聞いてけれ』

皆は芳松を見た。

『音松がせ、營業課長の息子の清次と喧嘩してな、今事務所にとめられて居るんだ』

役人たちの舍宅は町から一段と高い、山の麓の傾斜に建てられてゐた。其處からは町と鑛山の全景が眺望された。が子供たちにとつては遊び場に缺けてゐた。鑛夫の子供たちとは遊ばない『坊ッちやん』たちも、ベースボールをするときは、勢ひ汚いゴミゴミした町に降りて來なければならなかつた鑛山事務所の建物と製錬所の間の空地は鑛夫の子供たちの遊び場であつた。がそれが自分の父親たちの居る事務所に續いた地域であることを楯にとつて『坊ッちやん』たちは必要に應じて鑛夫の子供た

ちから其處を占領することが出來た。

芳松は弟に對する兄らしい感情に動かされながら、事のあらましを話した。坊ッちやんたちが其處にやつて來たとき音松たちが野球をしてゐた。音松はいつもと違ひ彼等の請求に應じなかつた。頑として動かないのを知ると坊ッちやんたちは仕方なしに見て居た。妨害が始まつた。飛んで來たボールを清次が握つて放さなかつた。音松は『皆してかかれッ』と叫びながら清次の方に突ッかかつて行つた。その勢ひに恐れて坊ッちやんたちは逃げた。清次一人が下駄を脱いで振り廻はした。が跣足の子供たちは四方から群つて來た。清次は音松に毆られて泣き出して了つた。其處へ鏞夫を初年兵のやうに取扱ふことに得意を感じてゐる上等兵上りの事務所の小使が出て來て音松を捕えた。小使は清次の父親の營業課長のお覺え目出度くあり度い爲めに音松を散々毆つた上でまだ引き止めてゐるのであつた。

『俺ァよつぽど毆り込みに行つてやらうと思つたがやめた。音松は今日學校で清次と喧嘩して負けて來たからせ、坊ッちやんどもが二人も三人もかかつて來るのに、一人でやるから負けるなだ。お前達は向ふがグルで來たら此方も一緒になつてやることを知らねえ馬鹿だッて俺あ言つてやつたべせ。そうしたらやつ馬鹿だからすぐ喧嘩したもんだ』

芳松は初江の方を向いて言つた。

『大儀だども先生行つて來てたもれせ、受持の先生行つたらすぐ渡して呉れるべから』

芳松はたうに母を失つてゐた。父親はシキから上つて來てゐなかつた。芳松は何よりも自身で行つたときの感情の爆發を恐れた。それでなくても睨まれて居る體でこの事でかけ合ひに行くのは不利であつた。

初江はすぐ立つて袴をつけた。初江は仲間の爲めにする機會を待ち望んでゐた。それが今來たことが初江を喜ばせた。

五十治が言つた。

『俺たちも小きいとき、坊ッちやんたちによく虐められたもんだ。みんなもさうでなかつたか。校長が言つたつてよ。こんたらこと今までなかつたつて……そだがかういふことあれば、餓鬼どもだつて默つて虐められて居ねえべせ』

四

瓦斯ランプが天井からボンヤリ鈍い光りを放つてゐた。

坑は頭が支へさうに低かつた。芳松は窮屈さうに身をかがめ、一心にハンマーを揮つて居た。首筋は油を流したやうな汗で光り、襯衣の脊中には汗のシミが出て居た。シミは見る見る脊中一杯に擴つて行つた。

振り上げる度、磨滅したハンマーの尖端がキラキラと輝いた。そのタガネを打つ音が快く響いた。僅かに身を入れる餘地しか無い中に、汗の香と地層から發散する異樣な臭氣で息詰るやうだつた。水に濱つた足は氣持ち悪くふやけて居た。

指の太く短い頑丈な拳がタガネをガッシリ握つて居た。それが微かに慄えながら、タガネと一緒にズシズシと鑛石の層に少しづつメリ込んで行つた。いい加減それを續けると芳松はタガネを穴から拔き出し、手を突ッ込んで粉沫をかき出した。微かな粉がキラキラ輝きながら飛び散つた。それが終ると芳松はまたハンマーを振り上げた。

三つのハッパ穴を掘り終ると芳松は道具を下に置き、古繩のやうな鉢卷を脱し、グルグルッと頸筋を拭いた。體に浴びた鑛石の粉を拂ひ落した。そして今度は鉢卷にせず頸に捲いた。

「チェッ」

ハッパ（ダイナマイト）の一方の切口の紙を破つて鳥渡舐めて見てゐた芳松は眉をしかめて舌打ちした。粗惡なハッパだつた。また不發で小屋まで貰ひに行かねばならないかも知れない。芳松は導火線の尖端の雷管をハッパの一方の切口にメリ込ませ、反對の切口の紙を破りとつた。三つのハッパ穴からはみちびの尖端が少しづつ顔を出してゐる。初めのはうまくついたが、二つ目が何うしても點火しない。芳松は顔を近寄せ、强く息を吹きかけた。やつとの事でパッと赤い火の子が燃え出した。

他の一つは濛々と白い煙を吹き出し、赤い灼熱した一本の線となつて、穴の中へひたすらに燃えて行つた。煙硝の臭ひが鼻をついた。

芳松は馴れてゐた。ゆつくり其處に脱ぎすててあつたムジリ（一種の勞働着）と道具をとり上げ、天井のランプを降ろし、頭を屈めて支坑へと出て行つた。

「悪いハッパだなあ、あれだばなんぼかけても一尺四方落ちれば精一杯だべ」

芳松はペッペッと薄黑い唾液を吐き出しながら、其處に居合はせた五一郎と覺平に言つた。

「ほんとだ、それはいいども不發の時には命がけだからなあ、お上では俺達の命など何とも思つて居ねえべ。百五十圓出せばそれで濟むこつたからなあ」

下に置いた瓦斯ランプの傍らに大の字に寢そべつた五一郎が答へた。

突然近くでハッパの爆發する物凄い音響が轟いた。破片が恐ろしい勢ひで上磐や下磐や支柱に跳ね

返つたかと思ふと、ゴーッと地中に籠つた不氣味な音が永く尾をひいた。その動亂に押し出され、煙硝の臭ひのする空氣がサッと風のやうに此方に流れて來た。下に置いた三つの瓦斯ランプの火が一樣にチラチラと搖れた。芳松たちの影繪が彼方此方に搖れ動いた。それが二發續いた。

「二發彈けたやうだなあ」

近くの、積み重ねた坑木のかげから芳松の父親の兼松の聲がした。

「うむ二發だ」

「お前何發しつけた」

「三發よ」

その聲と同時に一層荒々しい音響が一發また一發爆發した。直き死んだやうな靜寂が歸つて來た。

また兼松の氣づかはしげな聲がした。

「一發彈けねやうだな」

「うむ、あんたらハッパぢや、中々彈けねえな當り前だ」

で五一郎はハッパに使ふ卷線香の煙をうるさがつて岩に小摺りつけて消しながら言つた。

「政治のお父がせ、購買のもの高くなつたから掛け合ひに行かねばいけねえつてたで」

「當り前だべ、稼ぎ賃は値切る一方だのに品物はドンドン上る一方でねえか、何處のお父もお母も大こぼしだべせ」

覺平は起き直つた。

「購買の吉右衛門を殴ればいいで」

「そんな事して見なよ」

兼松は坑木のかげから口を入れた。

「碌なことにならねえべ。ここぢや外と違つて殴つたり蹴つたりするもの無いからなあ」

五一郎は腹立たしげに叫んだ。

「そだら、お父さんは何にも不平をもたねえて言ふなが」

「不平はあるどもせ、お前たち若いもののやうに短氣な眞似は出來ねえべせ、昔から今まで不平はなんぼもあつたが、其處を默つて辛棒して來たから丸く納つて來たべせ」

「お父」

それまで默つてゐた息子の芳松は強く呼びかけた。

「お前の言つてることはあべこべだべせ。默つて辛棒して來たから丸く納つて來たなんて、何處が丸

く納つて來たてが、食ふものも食へなくなつて來たばかりだべせ、どんなひどい目に遭つても音も出さねえで來たからかういふことになつたべせ。米の飯のかはりに芋を食つてよ、この頃ぢや、お前の好きな酒も飲めなくなつたべせ」

『酒でものめば不平も出るども、のまねば言ふことも無いべせ。俺あこれだけ永生きして居る分で有難いと思つて居るなだ」

『チェッ』

芳松の唇は生物のやうに動いた。

『偽言ふ譯か、まさかお父だつて自分ばかり永生きすればそれでいいと思つて居るわけでもなかべせ外の婆婆では人生五十年とか何とか言つてるべせ。それがよ此處では四十から上生きるものは何人も居ねえでねえか。當り前なら働き盛りの年だべせ。それが四十の聲きくかきかねえに皆バタバタと死ぬでねえか。それは何の爲めだと思ふ。爺婆の代から地の底さ潜つて生きて來たおかげだべせ。お負けにここぢや滿足な餓鬼さへ生れたためし無いでねえか。お前が傑いもんだつて言つてた初江さんが學校をやめさせられたなは何の爲めだと思ふ、初江さんは學校さ上つたから傑いのでねえで、不平のために先生やめてもやるから皆傑いもんだと言つてるのだべせ。それだからよ、不平をもたねえで默て居るといふことは一番いけねえ、みんなの不平を寄せ集めて、お上さ打ッつけるやうにしねばいけねべせ』

『不平をぶッつけたつてお上の威光に何うすることも出來ねえべせ。お前方は氣が短かくていけねえなだ』

『お父、お前先達、俺たち皆で仕事を休んだらお上では何うする事も出來ねえ、結局こつちの言ふことを聞かねばならなくなるつて言つたら、それはさうだと言つたでねえか、忘れてしまつたなが、お前一人で事務所さ行つて七重の膝を八重に折り曲げてもどうにもならねえことは分り切つて居るこつたみんな一緒になつてやらねば駄目だ。音松だつてもみんなでかかつたから清次に勝つたやうなもんだべせ。……お前はそれとも兵隊上りの小使などに音松があんなひどい目に會つてもそれでも口惜しくねえのか、自分の息子があんな野郎にひどい眼に會つても、え、お父』

暫らく返事が無かつた。がやがて兼松は鈍い聲で呟いた。

『碌々ハッパ穴も掘れねえやうな若いものばかり集つて何だ彼だ言つても、それで何うなるものでもなかべせ』

闇の中に芳松の眼がギラギラ輝いた。

『其處だよ、そこだから言つてるべせ。若いものばかりでも仕様がねえから言つてるべせ。お父は仲間でも一番の年寄りだ。お前の言ふことなら大概のものきくべせ。そだからよ、そだから組合さ這入つて一緒になつてやつて呉れつて言つてるなだべせ。お前さへその氣なら、あと町のもの全體這入つたも同じだからなあ』

坑木のかげで瓦斯ランプが動いた。兼松は無言のまゝ向ふへハッパを見に出かけた。入口のところで兼松はランプを下に置いて手拭でしつかりと鼻と口を結へた。その上で鳥渡中へ進みかけたがまた入口に引き返して來た。そして息子の芳松の方に向つて叫んだ。

『芳松まだ這入らねえ方いいべ』

白い煙が濛々と立ち罩め、ムンと熱の籠つた空氣はむせる程燐硝の臭ひがした。煙くて眼を開けて居られない。それに煙でランプが霞み用を足さない。手さぐりで坑底に辿りついた。

其處はもう煙が抜けてゐた。二つのハッパ穴は僅か一尺か二尺ひろがつて居るに過ぎなかつた。兼松はハンマーでゴッゴッ其處いらを叩き廻して見た。全體にヒビの這入つた鈍い音がした。

突然、兼松はギョッとして立ち竦んだ。

すぐ近くで恐ろしい勢ひでハッパが彈けた。一しきり、岸に碎ける怒濤のやうな岩石の崩れ、跳ね返る音が轟いた。それに續く陰に籠つた不氣味な唸りが消えるとアトには死んだやうな靜けさが來た。

兼松は夢中で飛び出し、支坑から芳松のハッパをしかけた坑底にかけ込んだ。濛々と立ち罩めた煙の中に、眞ン中から割箸のやうにヘシ折れた支柱に凭りかかり棒立ちになつて居る芳松の姿が見えた。

瓦斯ランプの光りが微かに芳松の鮮血に染つた横顔を見せた。

『芳松ッ』

叫びながら飛び込んだ兼松の足もとに、芳松の體は丸太ン棒のやうに倒れて來た。

見張部屋の電話のベルがけたたましく鳴つた。

電話にかかつた給仕の少年は鳥渡部屋を出、捲揚場に向つて叫んだ。

『十一番』

『また負傷だらう』

役人は岩壁にかけてある『坑内傷害日記』を取つて机の上に投げ出した。それには毎日三、四件の輕傷、重傷、致死の事故が無造作に書き込まれてあつた。

五一郎に脊負はれた芳松と兼松が這入つて來た。兼松は恐ろしさの爲めに譯が分らなくなつた樣子

で急に十年も老け込んだやうに見えた。
額を結へた手拭もシャツの胸も眞ッ赤に染つて居た。無殘に碎けた芳松の顏の半面から、脊負つた五一郎の頸筋に絶間なく血がしたたり落ち、それが更に下に流れ落ちた。給仕の少年はそれが點々と土間を濡らして行くのを物珍らしげに凝と見てゐた。
「何處をやつたんだ」
役人は顏も上げずに訊いた。
「頭と胸です」
「落磐かね」
「なんの、ハッパの不發だす」
象松の聲は怒りにわなないてゐた。鑛夫たちがケージで上つて來た。部屋に這入つて來ると申合せたやうにテーブルの上にランプを置いた。テーブルの上は忽ちランプで一杯になつた。その一つ一つの焰が同じやうにチラチラ搖れ動いた。
「外へ出て呉れ、外へ」
役人は帳面から額を上げるとブリブリして叫んだ。が鑛夫たちの樣子はいつもと違つて居た。主人

に叱られた犬のやうではなかつた。普段鈍くどんよりした鑛夫の眼は強いキラキラした光りを帶びて居た。若い學校出の役人はあきらめて俯向いて了つた。
恰度這入つて來た一人の小頭が、いきなり瓦斯ランプをグイと突きつけて、芳松の血みどろの顏を照らした。唇がひどく痙攣してゐた。
「またドヂを踏んだんだな、しようがねえ」
芳松は擔がれて行つた。
鑛夫たちはざわめき出した。
「ハッパが惡いからよ」
「不發ばかりぢやねえか」
「命なぞどうでも安いハッパを使つた方がいいつて言ふなだべせ」
「命が百あつたつて足りねべせ、こんたらハッパで仕事出來るてか」
言ひながら一人が一本のダイナマイトをテーブルに投げ出した。
「どれ貸して見な」
小頭は取り上げて一方の切口の紙を剝がしてペロりと舐めて見た。

『これが悪いつて言やがる、こりや上の部だぞ、悪いつて言ふなら仕事をよしたがいいだらう』

鑛夫たちの顏には急に引き緊つた表情が浮んだ。

『お前にハッパのよしあしが分るかよ』

『一人や二人仕事を止すのとは違ふで』

『みんな休んだら何うする氣だ』

『一人で引き受けるつもりだらうよ』

五

初江は購買に向つて急いだ。霙になりさうな寒い夕方であつた。溝の流れに浮いた家鴨の聲が寒々と響いた。初江の足もとから鷄が逃げ出した。鑛毒で食ふものの無い鷄どもは痩せてゐた。それが鑛夫たちの生活がドン詰りに落ちるに從つて一層痩せたやうに見えた。絶間ない無益な爭ひで毛が拔け筋張つた頸のあはれな樣子の鷄どもは、飢えた眼を鋭くしてウロウロ歩き廻つた。けたたましい爭ひが起つた。一番大きな鷄が貪慾な眼を輝やかして餌を啣へた鷄の脊に鋭い嘴を突き立てた。そのすきに一群の鷄は落ちた餌に向つて殺到した。が爭ひが結局何物も自分等に齎らさないのを知ると鷄の群は絶望的な眼をして四方に散つた。

川岸の購買部の五燭の電燈の下に鑛夫や女房たちの黒い姿が群つてゐた。

『三等米なんぼだべ』

と一人の女鑛夫が言つた。朝鮮米や滋賀米をぶちまぜた米にも等級があつた。

『相場が上つて恰度になつたよ』

主任の吉右衛門が言つた。女房たちは何かブツブツ言ひ合つたがすぐやめた。女房たちは掛買の帳面とメリケン袋をブラ下げた姿でさうして待つてゐれば値段が下るとでも言つたやうに默り續けた。

初江の姿を認めると、女房たちは皆丁寧に頭を下げて挨拶した。免職になつた初江に對する譯の分らない恐れと、善良な同情とが、それ等の滿されない顏の一つ〳〵に浮んだ。

『三等二升呉れせ』

其處の板の間に腰かけてゐたおつぎは言つた。

『帳面切れだねか』

吉右門は取り合はず女房たちの方を向いた。

『さあお前方持つて行くなら早くせ』
が女房たちは默つてゐた。
『そだら薩摩芋呉れせ』
おつぎがまた言つた。返事が無かつた。がおつぎは別段氣にもしない樣子で、キョロキョロあたりを見廻はした。その顏には拒まれ、虐められることに馴れて居るものに特有な硬化した表情があつた。
おつぎは初江を見出すとピョコンと頭を下げた。おつぎはこの夏に父親が肺病で死ぬと同時に學校をやめて撰鑛場で働いてゐた。岩片で頭を打たれ腦膜炎を起し白痴になつた母親は井戸に落ちて死にさうになつて以來、座敷牢に入れられてゐた。事務所では生活能力無いものと見做して長屋立退きを迫つた。或る日たうとう疊を剝しにかかつた。兩隣りと近所の鑛夫がかけつけ、おつぎが撰鑛場で働くことになつてやつと鳧がついた。おつぎは白痴の母親と二人の弟を抱えて働き續けて居た。母親は牢の中を獸のやうに四つ這ひになつて歩き廻つてゐた。まだ四十前といふのにすつかり白髮になつて居た。食ふとすぐ食つたことを忘れた。三十分經つと母親は食事を求めた。
女房たちの數は段々ふえた。先から居る女房は後から來た女房に何か呟いた。
おつぎはまた言つた。

『なんぼでもいいから、薩摩芋呉れせ』
『帳面切れになつて居るべせ、何度言つても同じこつた』
吉右衛門はうるさげに言つた。初江は思はず前の方に體を動かした。
『少しでもやればいいねしか』
『それが出來たらいいどもせ』
吉右衛門は空うそぶいた。右の方の壁際に十俵程積んである芋俵を振向き、初江は上釣つた聲で言つた。
『こんなにあるもの、少しばかりやつても困ることねえすべ』
女房たちは一セイに内心恐れて居た初江を見た。自分等の言ひたい言葉を初江の口から聞いたことが明らかに女房だちを驚ろかした。
騷々しい囁きが起つた。
拒まれたことに別段悲しさも感ぜずポカンとして居たおつぎは、初江の聲を聞き、その上氣した顏を見ると一緒に、急に悲しくなつて來た。とそれまでかたくせき止められて居た感情が、恐ろしい勢でおつぎの胸に湧き起つて來た。

キラキラ光るものがおつぎの眼にあらはれた。顔が歪んだ。おつぎは立上つた。

土間は女房たちや鑛夫で一杯になつて居た。おつぎはしやくり上げながらその間をわけて行つた。その高い泣き聲が起つた。ざわめきと赤子の泣き聲が混り合つた。

吉右衛門は叫んだ。

「品物いらなかつたら皆歸れ、用のないもの歸れ」

重々しい沈默が來た。女房たちは一セイに吉右衛門を見た。吉右衛門の眼がキラキラ不安な光りを帶びた。

突然一つの聲が靜けさを破つた。

「糞たれ爺」

吉右衛門は知らぬ顏をした。彼方此方から聲が飛んだ。

「乞食爺」

「米の値下げやがれ」

「慾たかれ爺」

「歸るも歸らねえも此方の勝手だべせ」

初江の周圍には、何時か憤りに滿ちた顏が群つてゐた。それ等の顏は何か言はずには濟まされないことを物語つてゐた。初江は驚きに打たれて自分の周圍を見た。ある昂奮が其處いらに漲つてゐた。初江はそれと一緒になつて昂奮を感じてゐる自分を見出した。誰も其處を動かうとしなかつた。女房たちは後から後から押しかけて來た。初江の體は何時かギツシリ周圍から押しつけられてゐた。後から押されて少しづつ前に位置を變えてゐることが分つた。女房たちは騷々しく呟き合つた。烈しい叫び聲が彼方此方から聞えた。初江は周圍の樣子が數分前と丸で變つたのを見てとつた。それは豫想しなかつた突然さで初江を驚ろかし不安にした。その中には五十治もその仲間も居なかつた。初江はもう眤として居られなかつた。

初江は人混みをかき分けて外に出た。そして五十治の居る坑内に向つて男の子の樣に走り出した。

途中幾人もの此方にかけて來る鑛夫たちと摺れちがつた。

「お父さん、大變なことになつたもだしな」

唯かがうしろから聲をかけた。兼松は立停つて暗い中にその顏をさがした。

購買の前は鑛夫たちの人だかりで一杯であつた。ヒリヒリと寒い夜の空氣の中に群集は犇々と寄り合つてゐた。購買の入口から漏れる微かな光りの中に鑛夫たちの引き緊つた顏が一つ一つ浮き上つて

見えた。兼松はすぐ近くに筋向ひの長屋の作次郎の昂奮した微笑を浮かべた顔を見出した。兼松はあたりに聞えよがしの大聲で叫んだ。

『當り前だよ、購買とお上とは同じ穴の狸だべせ、默つて居たら際限ないからな』

その聲は周圍に同じやうな叫び聲の渦をつくつた。

『ひと月の間に二度も三度も米の値上げるつて話あるものでねえ』

『その癖まるでコザキ米（粉米）でねえかよ』

『どんな安米だか分るものでねえぞ』

兼松はまた何か叫ばうとしたが、うまい言葉が見當らなかつた。いや兼松は言つていい事と悪いことのあるのに氣がついた。兼松はどう振舞つたものか當惑して凝と考え込んだ。と兼松は一時間前まで人の顏さへ見れば組合に入ることを薦めて歩いて居た自分に氣がついた。それをどうして忘れて居たんだらう。兼松は自分で自分が可笑しくなつて笑ひ出した。

直き兼松は人混みを掻き分けて知つた顏を探して歩いてゐた。見つかるとすぐその後に尾いて行つて聲をかけた。

『七藏お前組合さ這入らねが、かういふ事つてものは皆組合さ這入つて、皆して意見を持ち出して一

緒にやらねばいけねえもんだとよ』

『お父さんも這入つたのけ、そだば俺も這入るし』

七藏は答へた。

『這入るか、それあよかつたな、そだばな、みんなささう言つて歩いて呉れ』

小氣味よい硝子の碎ける音がした。何處からともなくバラバラと石が飛んだ。

『おい誰だ、亂暴すると承知しねえぞ』

その聲と一緒に購買の建物に近く、烈しい罵り、喚き、叫び聲が起つた。それまで眠と闇の中に澱んでゐた群集はざはめき出した。ぢつと後ろに居る鑛夫の群は波立ちながら前の方に押して行つた。喚き、罵りの聲は中々やまなかつた。不安な空氣が漲つた。それは急を聞いてかけつけたゴロッキどもの到來を知らせた。

『吉右衛門を出せ』

『やッつけれ』

『狸爺を引ッ張り出せ』

『ぶッつぶせ』

騒音が刻々にたかまつて行つた。

メリメリと木の折れるやうな音が薄氣味惡く寒い空氣をふるはして響いて來た。叫び、喚きの中には悲鳴も混つた。木片や石が方々から飛んだ。

がそれ等のはつきりとした目的に集中されない、やけくそな荒んだ喧騒の中に、冷靜な意志のある聲が響きはじめた。

『お前方、やめれ』

『皆して相談してからにせ』

『決議しねばいけねえ』

『川上の空場さ行け』

聲の主はみんな急がしく彼方此方を駈け廻りながら叫んでゐた。それ等の聲は共通したある響きによつて他の聲から區別された。五十治達を坑内から探し出して來た初江は、空腹も寒さも忘れて『お父さん、お父さん、』と叫びながら兼松を探し求めて歩いて居た。

鹽涸れた聲で何か熱心に叫んでゐる聲の主を一群の鑛夫がとりまいて居た。初江は鑛夫たちの中に割り込んで覗き込んだ。微かな光りが心持ち腰の屈んだ老人の姿を見せた。話してゐるのは息子の芳

松がハツバで死んでから熱心な組合員の一人となつた兼松であつた。

『いいかお前方分つたか、組合さ這入らねば何も出來ねえや。米も安くならねえし、稼ぎ錢も高くならねえ、世の中は何うにもならねえ、嘘だと思つたら五十治さ聞いて見れ、お前方一人一人事務所さ行つてお願ひ申したつて何にもならねえとせ、皆一緒にならねばいけねえとせ……』

鑛夫たちの眼は芳松が死んで以來、すつかり息子のあとを引き受け、まるで樣子の變つた兼松の可笑しい程一生懸命な顏に注がれてゐた。初江はかういふところで組合員の獲得をやつてゐる兼松がひどく可笑しく、思はずふき出してしまつた。

鑛夫たちはそれが二、三日前まで自分たちの子供の先生であつた初江であるのを見た。初江は息せいて言つた。

『お父さん、組合のこと後でいいから、相談するから皆に川上の廣場さ行つて呉れつて頼んで呉れせ』

『ハイ來た』

兼松は氣輕に答へた。そして直ぐ大きな聲で觸れ廻つて歩いた。

六

日が落ちたばかりといふのに長屋は戸をしめて居た。また今夜一騒動起きるに違ひないといふ噂が町に擴つてゐた。人影のないひつそりとした通りを雪もよいの風が寒々と吹き拔けて行つた。

遙か川上の方向に篝火が赤々と燃え立つて居た。そつちから蜂の唸りのやうな騒音が靜かな町に傳つて來た。

爭議本部の長屋の一棟は鑛夫達で一杯になつて居た。所々に起つた噂やストライキの今後のなり行きについて皆は騒々しく話し合つた。坑内の電氣部に働いて居る正二が片隅で謄寫版にかかつてゐた。『起て全山の諸君』といふ冒頭に始まつたストライキ宣言や檄文が周圍の壁に所かまはず貼つてあつた。半分へシ折れた障子や大きな穴の明いた壁や疊の燒けこがしは、昨日の鑛山主側のゴロッキ共の襲來を物語つてゐた。總てこれ等の地震の跡のやうな光景は一層ストライキの空氣を濃厚にしてゐた。

初江は流し元で女房たちに交つて警備隊の炊出に手傳つてゐた。働きながらも初江は、其處から二十間とは離れてゐない川岸に近く、赤々と燃え立つて居る篝火の方に眼をやることを忘れなかつた。

火の子を散らしてピシピシ勢ひよく燃え上る火は、胸の空く程氣持ちよく美しかつた。一つ一つの篝火の周圍には、爭議の前と後とでは全で表情の變つた鑛夫たちの顏が一つ一つ見分けられる程はつきり闇の中に浮いて見えた。

初江はその中に磁石のやうな敏感さで、繃帶で右腕を釣り下げた五十治の姿を見出した。初江の胸は何か知れない不安でワクワクした。が今は恐ろしいといふ氣はしなかつた。この二、三日間の出來事がめまぐるしく初江の腦裏を往來した。

購買の前から川上の廣場へ移動した群集は、五十治、兼松たちの必死の努力にも拘はらず、小頭どもに攪亂されてどうにも纏りを見せなかつた。仕舞に群集は烏合の衆として散つて了つた。翌日N町の岩藏たちの同志が岩藏を除き四人祕かに入山した。岩藏だけ殘つてAやTの鑛山爭議數度の經驗を經て來て居る山部鐵男を迎へ、一緒に入山することに手筈がきまつた。その夜この四人と五十治たち數人は、夜更けてから各方面に分れ長屋から長屋に檄文や宣傳ビラを配布して廻つた。一同は無事に歸つた。が五十治だけが姿を見せなかつた。不安な夜が明けた。何處からともなく五十治が數人の小頭に捕えられ半殺しにされたことが聞えて來た。十數名の同志は五十治奪還に出かけた。全身蒼黑いむくみの出た五十治が戸板に乘せられて運ばれて來た。夜が明けるまでツルの柄で毆られながら、壁一重へだてた請願巡査派出所で佩劍のガチャガチャといふ音を幾度も聞いたと五十治は言つた。

初江は五十治を見た瞬間、泣きながら萬事お終ひだと思つた。がこのことは忽ち長屋に傳へられ、全山の鑛夫の耳を鐵砲玉のやうに貫いた。N町から來た四人を先頭に同志の群は各坑内に潜入して行

つた。初江だけは坑口の外に殘つて、息を詰めてその結果を待つてゐた。初江の眼から涙が流れた。松三郎を先頭に鑛夫の長い列が坑道からあふれて來た。初江は列に加つて歩き出した。昂奮からトロ道の枕木に躓いて轉びまた起き上つて歩いた。彼方此方の坑口から鑛夫の列がうねつて來た。製煉所や撰鑛場は空虛になつた。熔鑛爐の大煙突の煙は鼠の尻ッポのやうに微かになつて行つた。

町の上には廣々とした空が見えて來た。夕方に近い一とき、雲切れがして氣持のいい青空が顏を出し、キラキラした光りが漏れ、それが長屋の軒や路の上を照らした。數十年來煤煙で見ることの無かつた廣々とした大空を鑛夫たちは聲を上げて叫びたいやうな喜びと物珍らしさで見上げた。夜、警官隊が入山した。三日目の夜、ゴロッキの一隊が、倶樂部で振舞酒を喰つた揭句、一杯氣嫌で爭議團本部になだれ込んだ。障子がヘシ折れ、壁がくだけ、土瓶や爐の灰が飛んだが鑛夫たちの必死の防衛はゴロッキどもの奪取から五十治其の他を救つた。坑口や製煉所の壁に『如何なる種類の要求を出しても事務所は受付ける意志がない、卽刻入坑しないものは馘首する』といふ意味のビラが貼り出された。がそれは却つて同志の結束をかためることに役立つた。

五十治は棒切れで焚火をかき立てながら言つた。

『お父さんは行くのをやめれせ、若いものだけ行くがいいからな』

萬事に世話好きな兼松は此處でも本性を出して自說を曲げなかつた。

『そだつて餘り小人數だばいけねえぜ、先刻倶樂部で飲んでゐた奴ども三、四十人も居たから、十人や二十人では何うにもならねえべせ』

警備隊の鑛夫たちの顏が集つて來た。皆は二人の顏を見くらべた。警官隊が事あれかしと望んでゐることは分り切つてゐた。で警備隊が山部と岩藏の護衛に當つてゴロッキどもとの爭ひを避けないことは、まんまと彼等の術策に落ちるに等しかつた。そこで最初五十人と決めた繰り出しは十人に變更された。

五十治は穩やかに言つた。

『兎に角入山すればそれでいいなだから、十人で澤山だすべ。足の早いものばかり十人……まづお父さんは殘つて居れせ』

『そだか、そだらそれでもいい』

兼松はがつかりした樣子で言つた。

『用意が出來たして』

初江が出て來て炊出の出來たことを知らせた。繰り出しに選ばれた若者たちは長屋に這入て行つた。

十數年前まで採掘されて居た牛の脊のやうな禿山を登り切ると、突然闇を透して遙か下に一群の篝火が見えた。それが其儘流れに映つてチラチラ搖れてゐるのが美しかつた。岩藏は思はず歡喜の聲を上げ一散に走り出したい衝動を感じた。

『あれだ、走るすか』

岩藏と山部は駈け出した。が直きに先に立つた山部がピタリと立停つた。多勢のガヤガヤいふ話し聲と此方へ近付いて來る跫音が聞えた。

『小頭どもぢやないかな』

山部が落着いた聲で言つた。

『仲間だすべ。小頭どもならかくれてゐるにきまつて居るす』

話し聲と跫音は段々近づいて來た。多勢の黑い姿が闇を透して見えた。二人は思はず立停つた。岩藏は聲をかけやうとして躊躇した。向ふの聲が叫んだ。

『其處へ來るのは誰だ』

『山部だ、山部鐵男だ』

山部の巾のある聲が響いた。と無數の黑い影がバラバラと押し寄せて來た。どの位の人數か見當がつかなかつた。

『何しに來たんだ』

その聲と一緒にピシリと一擊岩藏の脊中に來た。岩藏は棍棒を振り廻して應戰した。が相手の攻擊は不思議に段々弱められた。そして四方から二人をとりまいた。

山部は嗾鳴つた。

『一體どうしやうつてんだ』

『いやァ山部さん、こゝはAやTとは譯が違ひますぜ、こんなところへやつて來て貰つては困りますよ』

頭らしいのがイヤにおとなしく出た。

兩方から腕を取られた山部と岩藏とを中心にしてゴロッキの一隊は今來た路をとつて返した。

聯絡を失はないために岩藏は大きな聲で山部を呼び續けた。山部の返事はすぐ近くから、またズッと向ふから響いて來た。が暫らくするとこの一隊は停止した。ざわめきが起つた。不安な空氣が闇のなかに漲つた。岩藏は動物的な本能で仲間の來たことを感じた。

彼方此方にバラバラにひろがつたゴロッキの一隊の中に、彈丸のやうに鑛夫の一隊が飛び込んで來た。岩藏は自分を呼ぶ聲を聞いた。ゴロッキから體を振りもぎつて岩藏はその聲の方へかけつけた。仲間は十人そこ〳〵だつた。岩藏は自分の耳に口を寄せて呟く聲を聞いた。

『山部さん此處に居るから安心だで』

ゴロッキどもは鑛夫の一隊を遠巻きにしてじり寄つて來た。岩藏は今更のやうに相手の多數なのに氣付いた。

『みんなかたまつて一直線に走れ』

岩藏は闇の中に眼を輝やかせ耳から耳に言葉を押し込んだ。

『たたきのめせ』

『やッつけろ』

相手は四方からジリジリ寄せて來た。戰鬪の前の殺伐な重苦しい空氣が凍てついた風と一緒に押し寄せて來た。がその瞬間『そらッ』といふかけ聲と一緒に鑛夫の一隊は無數のゴロッキの包圍した一角を烈しく突き破つてトラックのやうに飛び出した。

飛び出す瞬間、岩藏は體の彼方此方に烈しい打擊を感じた。女房たちが裏山に茱ッ葉をとりに行く時だけ通る足跡が微かについてゐるに過ぎない路は直き矢はれた。仲間の一隊は岩に躓躓いたり、轉んだりしながら、禿山の下り路を滅茶苦茶に走つた。闇の中の篝火は段々近づいて來た。その篝火の周圍にはまた、次第に仲間の無數の顏が見え出した。

——一九二九・二——

昭和五年五月十九日印刷
昭和五年五月二十二日發行

定價五十錢

文藝戰線叢書
第九篇
恐怖

著者　伊藤永之介
東京市神田區九段下ビル八號
勞農藝術家聯盟內
發行者　石井安一
東京市小石川區林町四三
印刷所　共働印刷生產組合

發行所　東京市神田區今川小路三丁目一番地
文藝戰線出版部
振替東京五九三八七

文藝戰線叢書 (各冊50セン)

1,員章を打つ……山本勝治
2,單一無產政黨論……山川均
3,明治初年の政治的農民一揆……田村榮太郎
4,ブル經濟ABC……青山・水木
5,天井裏の善公……金子洋文
6,日本無產階級の戰略……猪俣津南雄
7,ケルンの鐘……小島昂
8,レーニン主義ABC……青野季吉
9,恐慌……伊藤永之介

以下續刊

默禱……前田河廣一郎 80錢
施療室にて……平林たい子 1圓
無產階級の戰略戰術(發禁)……スターリン 30錢
インターナショナル發展史……ブハーリン 60錢
國際情勢と吾等の任務(發禁)……ブハーリン 40錢
資本の攻勢と農業問題(發禁)……コミンタン 90錢
赤旗の靡くところ……田口運藏 90錢

文藝戰線出版部發行

終

9

50セン

文藝戰線出版部